学庵集蒙求講解一

序凡例
傳引書

草庵和歌集蒙求諺解序

和歌はよむ事は難きなり。よむ事のかたちは。
ちう事もうさし。ちはやぶるいそぢよむ事の得ん
いつて。憤ふるはち。ちつぐいに又古奇れ如けをいい
のゐん事は。ほとくめつぎを作りとり。拵やはらし
此抄を編輯する事。年久しく故郷周防
なる岩國にて行うしはいつぎ。猶姪等の
ちちの。此書ぶんをしへ作る。いみし年。彼
國より序をのぐうあかれりいきを。
此書の講習はやうさ度よりいつぐと。其功

猶終はらざる。願はくは拙作をたまはりて
けるし。あるいは今の拙物ども紙上に載せよ。其文章
うけく。四海ぐるに事共出来ぬ。おろかなるそれ
がゝらを捨てをいくゝ苦しみはべり。同じくは、朝夕
ひいるしる。平懐の言葉につくゝがき弘いし
給へくゝ。其ものぐるしれ淺うゝめよ感じ。俗語
注してはらいしはべり。よりて。蒙求諸解と名付け
た。洗拙の諸書を注解をる。皆前世の緣
の獲藻をあつらへ。はべるゝ謬誤なりとも
ぐるぶまくそぐしいんあるべしとこそいへんや。

此草庵集にはべる。一句も所詮を先達の
鼇頭注解なし。ちゝ紙子ぐ敏ゝざるが幷に
あるて文空を詩ゝ。管の中に豹を窺ゝそや。
心の泉のそこ極ゝく。詞のうゝ法をげさ此集
のうゝをゝそぐうん事い。誠ゝ拙とゝて。
由良の門と波ゝ。蚊をゝてゝ紙貫ゝうんと
ゝゝ似ゝるべゝかの朱文ゝいゝるゝこそも。
楚辞を注をゝふ。類を爾事をまゝうま給
いぐゝ。李侍讀のゝざゝそゝうゝぐ。文選と彩をし。
祖述の謬ゝをゝいゝてゝゝゆゝてゝや。此拙のこゝろ

かりと。曾魚のそぐし。賓客のあやまりなくて。
くるべや。博く洽くさ君子これをかうべ。そぐ
ば。ねがうあり。大きなる業のくゆまるものかして。
千くの金をかしく人くなくいたるべくとつく
事なくなり。享保九のとし三月日。備前真宣河。
洛陽桃花坊の梅月堂にうぢ紙とるく

凡例

一此集の所れ中に。ふくはさくそうの事となり
ゆくめく。よく味へば。深き趣向あり。此所ゆ心
を付て見るべしとなん

一和歌に。花實相對ふる紙とて。此集の
所に。花い三四分にて。實い六七分なり。そのゆみ。われ
風。おくるうて。花のもとふる紙。師匠。按政長基公
わて。合を。世上の風をあくあくあくあくしゆ心なりゆへの
をくへ乃あ所ひくよみ結也。これ定家卿彩ちふ
景のもとふる紙ふいて。新勅撰に實紙とて撰い結
つくて所じ入ふる也。當世。地下れわうとくしゆ

正道を学びて趣向うつくしく詞やうやうかぐはしく風体と。はや後先達の妙絶ひとしく。姿そぞろにうるはしきなり。或いはやまりて。趣向のしつくさぬ巧也と思ひ。好くに耳にうる絃をつゝとおもいて。風体と。なを外々ゆく美風美体なるわりびとゝもがら共常々世集とゝだ。西行いとく正中の心よいうり。美風いこの風ゆうくるし。詠作功者も初心とも。其をとゝろべしと先哲の教訓なり。事心べなるうれしく。熟讀翫味とべさるもの也

一 学者作例の引よ。其模倣の作るる者とかく事い。

是をうら合うしいと。我が作る所の一首の句紙得るに階梯とあゆみ也。古語。古詩。経文。神書等と出たと雖不同。多く外ゝ。他者の罪あらん事を

一 作例の外。一言一句も。深奇足取をいひ。と名が詩。

一 言一句も出所をたいなしとは者ゝ考ゝ習ゝ

一 俗間の朝夕之詞共の中に其心とゝいたるべき故和歌と用ゝ何。ふかく害あるべきいわゆる心やもとれ事ゝ用ゝ古来諸書の抜ゝ之のべどゝ。

初心のゝ作ゝ者ゝ。ゝ以ゝ也ゝ。ゝ

紙ゝ之ゆゝいはゝるゝくゝ。ゝのゝ

ゝ今ゝゝいなくゝさゝ思ゝらゝゝ

判ごいもぎいうたてやどてかいはいと
等の新又いつまなれとはうきを同じ事にをれど
とも拙を仏さう事のやうふ思てるあり。此集の中に
出ちうを其所くしたてみるに注釈と。事の物多く。
くぐ仏事に成ぬ人も有べきやされども物い童蒙の
ためにて。識者ゆ志ちうを非。こ人罪すら事をれ
ちまを仏。事ま助字休めるまく云ま同じ名ばかりを
古今とこ合をて注と。傳授の後い是を除く
一人の伝名所の図。省略をば略す

領阿法師系図

道長

大織冠十一代法皇院兼家息
号法成寺又御堂
氏長者従一位摂政関白
大政大臣万寿四十二羽薨六
十二歳法名行覚

頼通

号宇治
氏長者従一位摂政関白
大政大臣永保元二三薨
八十三歳

師実

号京極氏長者従一位
摂政関白太政大臣康和
三二十三薨六十八歳

師通

号後二条又云京極
関白正二位内大臣康和元六薨
三十八歳

能実

号小野宮従二位大納言
長承元九九薨六十三歳

全春

仁春

仁尋

仁譽 ―― 泰尋 出家号禎阿 ―― 經賢 法印按察使僧都 又号歳空

堯尋 権大僧都 ―― 堯孝 法印権大僧都 号常光院新法橋 今樵者和歌所開闔号億四七歳六十五 ―― 女子

堯憲 堯孝為養子 実清水谷子

師實 ―― 維遠 ―― 十三代 ―― 光貞 下野守

貞宗 二階堂下総守出家号養阿 ―― 經賢 権大僧都 俱舎法院

作者部類云俗名貞宗二階堂下野守光貞子或云小野宮大納言紙實八世孫藤原系圖云道世西号禎阿号梅案僧都又号月空

一崑玉集云 禎阿 四條道場ふるとて後に取林寺とて身体をかくしたり

一迎陽文集云 作蔡花院者平生棲息之閑地終身安心之幽莊也 禎阿五句頌文

應安五年四月日

茅子注印大和尚位少僧都經賢 敬白

堯孝家集 文安三年三月十三日。蔡花園にゆきて。

集 そぐいきてそをもてあそぶ 社地らく

定阿蔡すうに。蔡花園いと城園。葛飾都にあり。其地孝妙心寺のもとに近年編集。山城名勝志み。妙心寺のもとに

つ。方角を不記。蔡花園の白蓮をつゝ。此集雜部。

滝水乃

一傳云。頓阿二十四歳にして叡山に登りて修学し。のちに
頓阿と改め。聖道門の修行ハ成就しがたき事をさとり
浄土門に入。阿弥陀乃名号を常にとなへ。良恵上人に
謁し。真宗院にも住して。西山の法義をうけ。如法念
仏をも行ハれけり。誉上人より洛乃明専寺にして。法
西流義をも伝授をうけられしとかや。和歌ハ二條大納
言為世卿の門弟として。古今相伝の一流也。為世卿
新拾遺集。撰集の時。未終して逝去ありしかバ。頓阿
続て撰じ終りぬ。所著の書に。井蛙抄四冊。新後頓
陳集二冊。家の集草庵集十冊。貞治二年ハ七十
余歳にて。摂政良基公と問答して。近代和歌の風体
を風雅なる秀歌として。正風体に改め。後世の亀鑑となせり。
且書名を愚問賢注と号す。和歌の四天王といへハ。頓阿

慶運。浄弁。兼好也。中にも。頓阿ハ勝れたりとぞ。四條
道場金蓮寺に住。霊山三室戸。仁和寺等にも暫時
住して後に双林寺にて寂せられ。八十四歳也。今に
墓ありて。西行。康頼乃墳に並べり
一東の野州聞書云。頓阿。忌日ハ三月十一日なりと
一徹書記物語云。或會に。頓阿。六首の題をとりて足
ましして。所用ありて小棚の下へ押入て置帰りける
あり。慶運が六首取れる題に。皆よまれたるをよみて
るに。既に短冊に書める所へ頓阿帰り来て見られて。
悉く以前の題に非ずと。墨をしすりて消くと書
えぞ出しぬ世なり。皆より此間慶運申さるゝハ賢く
ぞ我住けるが。祖の如くぞ。堪能乃程ハ。あつぱれ
ぬつきなそ申さるゝ。それ六首の中に。楼家ハいゝ歌

一 [illegible]

一 和言之。新河。芳遠。そして。所人あり。芳遠は。卿の[illegible]
[illegible]。新千載集。四首入り
[illegible]。遠信。[illegible]
[illegible]。[illegible]者を九[illegible]して。感涙を流し[illegible]
新河が所。千條首入り。後りの。吾所紙[illegible]
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]
を。東之。花和の草庵は。後。撰。捨[illegible]
今業之に。新河は所の所。新千載集を考るに。四首入
[illegible]。千條首入り。同集。淳和所入て芳遠所[illegible]

一 頼河所。入撰集数。続千載集。一首 続後拾遺集二首
風雅集一首 新千載集一首 新拾遺集九首 新後
拾遺集八首 新続古今集十九首
此集所数二千二首

一 流頭所三首 題文所一首 謙諧所千六首 外遠所百句
[illegible]。詩歌大概抄云。[illegible]所は。[illegible]の頂上の集
なり。三代集までは。其面[illegible]。強[illegible]。次第に陵
夷して。金葉。詞花。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]紙[illegible]由。世[illegible]。[illegible]。後成卿。千載集
撰[illegible]。[illegible]。金葉[illegible]風[illegible]。所は道中奥[illegible]
[illegible]。新古今[illegible]。[illegible]。新勅撰集[illegible]。[illegible]と
[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]
い進[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]
又。和所。陵夷[illegible]。[illegible]。後。普光園院殿。新河[illegible]
して。風体を[illegible]。[illegible]。再。和所の[illegible]
新河が。力也。愚問賢抄 杉原良基公作 云。貞和の比。毎月二度月[illegible]

百貫余の定大納言の職、又類なしとぞ。あるべき也。家
の人々の忠の秀かなる所を、尋ねて行べき郷に、河くま
じつ行也。能阿芸運、あねとかたる也。
斎藤道美、なべて、又勿論也。門真、雲入道能阿
どもよりも也。その比、能芸、三人、いづれも、
よろしきいとなり。能阿、かり幽玄の姿、すぐれ
たるべくなくて、もろもろ所毎に一かどのすぐれ
たる感、かりしかば、芸運、いとけなきこのて物さびて、
ちと古体さかりて、姿、広げくしにて、耳こすりに
なり也。定大納言、このなり、芸運をかたり、
面白ハ、ちとをかしかりぬべ人、なべ中
なれども、人の口ゆゑ、あるべ所ども、能阿、
芸の所ゆ。世所に、能阿、芸とかたりきこえ、御借

の儀をぞ、よろこ
一又云、行常に、能阿、あるべき也。
ちくなりもてなくはべ、芸運、とかたりさくなく称
なるべ所をば、不審心よりとかたり
一又云、百貫の地所、文の所、能阿、いとかたる。
けるべ、しるし紙、後、ちと、古体なる紙地也。
但、古用、そぐ、すぐなる紙、文、しさ、なる
所れ、しるべ年をぞ、地、とかへ、能阿、

引書　惣計三百二十五部

萬葉集　古今集　後撰集　拾遺集
後拾遺集　金葉集　詞花集　續詞花集
千載集　新古今集　新勅撰集　續後撰集
續古今集　續拾遺集　新後撰集　玉葉集
續千載集　風雅集　新千載集　新續古今集
人丸集　赤人集　家持集　猿丸集
躬恒集　兼輔集　元輔集　順集
信明集　重之集　伊勢集　公忠集
頼基集　貫之集　中務集　小大君集
元真集　紫式部日記　源太府集　拾玉集
月清集　長秋詠藻　拾遺愚艸　拾遺貞外
山家集　壬生二品集　玉吟集　隆祐集

散木集
後堀河院典侍集
千五百番歌合
太神宮百番歌合
順德院百首
嘉元百首
拾遺風躰集
新六帖
住吉物語
狭衣
喜撰式
同油注
祇中抄
堀河院百首初度
寂蓮集
千中行百歌合
宗尊親王三百首
弘長百首
金槐集
夫木集
題林愚抄
竹取物語
栄花物語
濱成式
奥儀抄
八雲御抄
同後度
廣澤歌合
丹後守百首
後鳥羽院御集
正治百首
兼好集
六帖
雪玉集
大和物語
清少納言
源氏河海抄
袋草紙
童蒙抄
釋阿賀茂社百首
六百番歌合
仲正集
宮内卿歌取
為家集
竟好集
現存六帖
伊勢物語
源氏物語
能因歌枕
同花鳥餘情
和語抄
顕注密勘

辞案抄
古今為家抄
百人一首宗祇抄
詞林採葉
續日本紀
増鏡
雲圖抄
朗詠集
明月記
康富記
拾芥抄
神皇正統記
源家系圖
藻鹽艸
近来風体抄
詠歌大概幽斎抄
色葉集
續日本後紀
三代實録
公事根元
新撰朗詠
園太暦
扶桑畧記
紀運録
太子傳
津守系圖
伊勢物語宗祇抄
新古今集幽斎抄
幽斎坐右
日本紀
日本紀畧
延喜式
本朝文粹
西宮抄
二水記
建武二年記
帝王世紀
徒子左系圖
作者部類
同疑抄
新古今常家抄
更科記
日本後紀
古語拾遺
江家次第
菅家後集
北山抄
山槐記
和名抄
帝王編年紀
藤原家系圖
崑玉集

普光院拜賀記
西行四季物語
竹林抄
同長門本
松葉集
山城名勝志
逍懷抄
仁和寺院家記
書經
論語
周禮
莊子
韓非子
迎陽文集
荒玖波集
四條道場緣起
盛衰記
梁塵秘抄
南禪寺記
見聞隨身抄
山神次第
易經
孟子
家語
列子
典略
東野州聞書
新撰菟玖波集
東鑑
太平記
歌林良材
元亨釋書
諸門跡譜
日吉鎮坐記
禮記
中庸
太戴禮
管子
世說
徹書記物語
私語
平家物語
名所類字集
百練抄
平戶記
九陸佛閣記
詩經
春秋左傳
大學
淮南子
荀子
國語

楚辭
史記
隋書
博物志
異苑
事物紀原
桑山記
天寶遺事
孟浩然詩集
東坡全集
唐詩訓解
韓文
古文前集
王充論衡
漢書
唐書
洞冥記
續齋諧記
事文類聚
風俗通
本艸綱目
杜詩全集
山谷詩集
千家詩
瀛奎律髓
古文後集
格物論
晉書
宋書
荆楚歲時記
西京雜記
鶴林玉露
圓機活法
酉陽雜俎
白氏文集
唐詩遺響
錦繡段
三体詩集
歐陽脩風土記
呂氏春秋
北史
搜神記
山海經
野客叢書
大明一統志
書言故事
淵明詩集
李白全集
唐詩絶句
遊仙窟
文選
詩人玉屑

西清詩話　古今詩話　緜珠詩格　王荆公詩集
横渠録　聽書蒙引　聽雨記談　篇海類編
小補韻會　字彙補　五車韻�subset　兼名苑
華嚴經　阿含經　楞嚴經　大日經
同義釋　法華經　觀無量壽經　無量壽經
阿弥陀經　涅槃經　金剛經　圓覚經
仁王經　般若心經　大綸　大雲經
悲花經　大方廣經　因果經　称讃經
藥師經　諸僧福田經　大集經　梵網經
四十二章經　地藏十輪經　地藏本願經　地持論
唯識論　智論　觀無量經疏　同法聽記
法華科注　四教儀　同集解　法華止觀
弥勒勸孝偈　六道講式　止觀輔行弘決　法苑珠林

澤氏要覧　翻譯名義集　往生要集　往生禮讃
相宗八要直解　釋迦五百大願　付法藏經　安樂集
般舟讃　龍樹菩薩十二禮文　傳燈録　盂蘭盆經新記
無生論　因明疏　愚明發心集　圓光大師法語詞傳
善導大師六時禮讃

右の中無度生の書は略名をたゝる
萬葉（万）　古今集（古）　後撰集（後）　拾遺（拾）　後拾遺（後拾）
金葉（金）　詞花（詞）　千載（千）　新古今（新古）　新勅撰（勅）
續後撰（續後）　已下准之　伊勢物語（伊物）　大和物語（大和）之類也

一此集印本ハ。霓窓の筆蹟のまゝ也と奥書にあり。多く
など記しぬ。傍にあらためれハ。彼河法師の筆蹟の本を写すと
いへども紙書写をかへすまゝの誤りあるか。愚見を得がたき
ありしかども有べきかハとかくの杜が詩の漏天と満天へ
なんどのあやまちを思へバ。改め正すべきにあらざれあり。

草庵和歌集蒙求諺解巻第一

梅月堂僧宣阿集編
梅仙堂平景新訂正

草ハ。篇海類編云。百卉総名。又荀爾曰。草々。庵ハ韻會曰。草舎。草庵ハ何にても草にて葺たる庵也。又麁相なる庵也。草庵の字ハ。白氏文集に。盧山草堂雨夜独宿。蘭省花時錦帳下。廬山雨夜草庵中。法華經信解品に。止宿草庵など。其外おほく見えたり。和ハ。和国也。昔ハ倭といへり。日本の名也。中古已来和に改めて大和と書るを。これ和歌ハ和国の歌也。唐詩と云に同じ。大きなる違ひなり。大和国を改めて書なりし是を注とする也

春の哥上

よしうて詠を

朝霞たなびきにけりしきしまのやまとしまねに春やきぬらん

たなびくハたちなびく也。靉靆。霏霺 万葉 軽引 同 薄靡

神仙巻 式嶋。喜撰式云。若詠大和しき嶋とよむべし

また敷嶋ハ大和と云に同じ。敷嶋乃高圓山をば大和の国の高円山とも云儀也。高圓山ハ和州添上郡春日山乃南に並びて有

作例 敷嶋や高圓山のくもまより光さしそふ弓はり乃月 土御門院 新古今秋

岩の都ともよめり。何れ郡ハらびられども。同じ大和国なれバかくよめるも。大和の三室大和の布留都と云儀也。敷嶋の大和ともよめり 万葉十三 かさねたる詞と志るべし。万葉詞林採葉第三に有。長歌略之。秋の名ハ奈良の

都の東を見れバ昨日まで風京の寒さにみまし豆がしかし春の立ぬれバ霧のたなびきて陽気がしてなにかしずかなる雅の?のどかになりしきを。おもしろくやそいひのべまたるは。惑なの 春をしといふがやや見よしけにかへら?くけるは?ゆかんとよみしもひて来けれ乃哥にとられたる。思入ありかくありぬべし

聖護院二品親王家五十首に

此法親王ハ。花園院の皇子。覚誉法親王。長吏なるべし。續古今春部に云 花の歌とや木幡の里へまいりて侍。所護院にて被仰作しく。戴きあしく都のよびかけに里のいかがりきも人のあへりし是ハ覚誉親王よりしかし御し也。子細ハ新續古今集和康安二年春乃比本情ニ住侍く哥合たる

みよし花 かゝるべきみち路なりてよし桜ちらしは宿乃
新続いでみる。二ふは親王覚誉とありてよし。
作者部類云。風雅。新千載。新拾遺。新後拾遺
新続古今の作者。又考。嘉元百首ふしへ。親王号
をうけてより縄覚あり紙は親王としるす
あしきは春さんものは新なるはへふ山もかたみ成なり
いふ玉の春さるときは。歳の始めて春の立ちする元日乃
縁也。あしたの紙暗して。あしたといへり。又玉ものにぞかはるねと。
あしもしと云。璞玉の未琢者と有。さるへ同しくれは。玉にまた
えむ売なりよありて。朔日新白へふ山とは 千載 新月の新白
つはなかりてる月のあらざる君は紙山出ぬにして 二 万葉 白へふ
は嵩る事をいふても。此本かりては業の縁の非。なお
やうなる縁也。望山月猶蔵影。定家 山のくしまちし

きこに白へるものを新たる秋の夜れ月 未本 八雲御抄第一云
朔日あけかなへるものしてる月れあかけるのも紙山ごしに見えて
是は新月の出る夜ぐ。有明の月乃西の山にある紙。けふと
共にするものは忘れずなる。山がしといへるも其名也。ふみ
つはくいては。月と月の映じるも故人いつまでも。新く月
の山のま映しみるなり云く 作例 春の雨うく白へるも色しあるかく
うす香さへかをりし山吹の花 後人家集 古今春下 此夜乃雨夜なくふ
かうそ紀りみなつる山のちらまく花も 八 万葉 一乃みとは
ゆふけの君と世よこそかしづき関守れど。此ほまりいは。
なしいはぬべくもあらず 桐壺 されはうけくしくふかやう。
成縁也 本の事は日数げりを白ひとて花も錦ぬる
乃古里 定家新 千春下 幽斎。唐右注云。此白は。かざりの縁也。月かと
いかりかぎりてぬする也云く 前の山は。同じ朔日なれ。今日は。

春の立て。暖日よかろう。朝日の光も小りやうたぶしくやさしの
ふんぷんとかをみるゆへ也こ。朝よりのぐらなる事まで
のぐらう

立春乃ちをを　立春れ氷一本

立てくにこちうをぶてて山ぶの岩こんをみて春立てきう
立春ゆへ氷もかんくちぶれしけて。活と岩かをこゆる也
活も春立てこと。其のをゆへ活をを立せて氷れしけをゆ活
ふとも。其乃をちうくきせ

祝言

相坂や清めのふくとをんをうをれ実を其やこゆん
あ坂やびやかの名のよしのやて有。鏡のやよ雅。相
坂い逢江関也。清水なをうく寄をもこと。氷乃ちけをる
相也。氷乃関こと。水ぶちりてなぶ社をりれしをゆ

なり。あ坂ハ関所なるゆへ。氷乃関といふ。水か
鳥乃氷の実をとうくて。氷乃関といふ。水か
奇れ山。昨日まで。音をあ、清めれ。けさより音をあ。氷の
関を春乃ちをく。氷のとけるゆへなるべしと也。関をは
こゆること。縁ゆへ。まやこゆんといふ。ぶやい。鏡のやよ
ぶ。上乃やし同意よ非。あ坂い東の事にあらず。まい東よ
つ。至るゆへ。春の来ることをこゆ事をこゆ

心。震

あつまじやを其れをを相坂れ山いもとをんの実をこてをれ
あつまこと。日本紀。景行紀よ。日本武尊。第橘媛が死
せし坂をこいて。碓日坂して。東南の方をうをそあづた
まいやと宣いしよう。山東乃国をあづまの国といふあづ
ハ。ハがを。あうはをいまづへ。あうのうを。酔てあづまとこ

へ行くなり。霞関は、武蔵の関なり。霧関と、霧とうたはんとて、霧関とかくなり。関ちるゆふ霧霞とうたへるなり。霞を抜き、都の東ふかくて、春ごこゆきぶりの、その中に霧しも、ちるしぶきを抜き、霞の関ぞやとよんゆるなり。霧霞も、武蔵の国なれば、東路やとよめる詞。まれなるかとて、霞関のある、東国の方とよみけてよめり　例　ちるしぶきを抜き、まくら詞、まれなるなり。

人とはぬ　拾玉集　風すさぶ　いでたえぬ　霧を関の名のみとちるしぶき　拾遠思艸　引合きんるんし　一説よ此

霞の関とは、相坂は、都の東のことにて、霧のたれば、あづかすまのこゆるなり。さて、相坂は、都の東の方とよめり。一夜明まで、霧れこゆるかとうたへるなり。

拾遺集春。貫之歌　彩もみか敷ある宿は彩色の

ゆふ里とうたへるなり。是をうたへて、新古今春下。摂政太政大臣　わたとうたはんとて、花園まれなるたれなり。

とうんまの敷ひとよあり。東路別。也。世間うたへば故里と志賀の年といへども、実いうなり。春敷の名なり也といふなり。

此注の名を業とうたへば、春敷の名なり。まの河分れ故郷とうたへ非。まの

の過去なる名なれば、春敷の名なり也とうたへ例　不の年は

日数ぶりと、自いうて、数花の古里　定家卿千春下　数花

の古里とうたへ家なれ、我住宿の春の言方　定家卿新春下　我住

ムの花の名なれ、住なくなれば、枝うまれ見て、昔、大数本下卿春下　此三

首拾遺集をとりてよめり。風、花のなかりしの故

郷はちるふり、梅の花なくて、有もれ　是別卿歌撰春　経寒の白紙よ

りれ、雪のうすさや、春の国なれ、ちいさく、ちみこふ

ふ　数本集春　此春の国と。経寒ゆくまぐ、春はこえゆくり

みなゆる秋いつしたゝへし　花はよしなそもかくしてもちりし杜なみ
春の関をし越とゆるれは　酒信坂川初度　留春不用関城固　朗詠　此哥
のたまに叶へり　山川よ冬の志らしみかけよあそてな秋風さしく
こなかまされ　忠岑新撰春上　さの後ぢやらし海の浦ぐまれたる明れ
月の関としてはへりるも名る　拾玉三　此三首同じ格にしてよめり。此哥
其の格にて霞敷の関也とは仮するへし　相宗八要直解
卷二よ六釋をあげたり。其中に持業釋。依主釋の二つ。
日用に便りあり。要多ければ略書とす。持業釋とは其物
なり其業をもちてあるゆへ持業と云。依主釋は注り
依ると名を釋とる也。此霞の関は霞敷の関なるゆへ霞
か主なり成也。依主釋也。又霞ひよりて定れる名とすれ
は持業釈とは成也。たとへば神桜山桜などは神と咲
わざありぬてく咲わざみするゆへ持業釋也。山桜は

山にありて家よありゆへ依主釋也。山にしあらぬ主なれはなり。
此二を心得ましは連綿の詞の注釈かよくちくる也

初春鶯

鶯れまぞの巣ゆるを呉竹のひとよあくまでいはるやきんもん
こぞの中よりと去年住し中よりの古巣也　亭　鶯れまぞを
のゆがりれふるをもやはまよいへれつまるかるるん　古今誹諧　此二。
るをよそら竹の節とよとつくれば夜よかけてよめり。鶯は竹
よやどるものなれば竹をよみ合せて竹の縁よ一よとかけ
そり鶯の去ぞの中よりれ竹なれども。一夜鳴ては春に
成りたる心を含ひいしも去りて鳴る也。又本哥の心は
古きといひて古さ物なるゆへ数よもたねせるるいつる也。
此哥は去年の居よりともふるさだ。春の至りを待つべ。
うぐひすとも春の秋去りて鳴と云心もあるべし

和歌所 二首

早春

和歌所。拾芥抄云。後撰集。天暦五年於梨壺以藏人少將伊尹為和歌所別當（和歌所根元是也）又曰建仁元年被置和歌所。開闔。源家長。寄人藤原清範。鴨長明。藤原秀能云云。明月記云。建仁元年七月廿六日己時計。參上。此間右中弁奉書到來。明日可被始和歌所事。為寄人西園寺可令參仕給。追仰。初可被講和歌。以松月夜涼為題。凝風情。可令參入給。和歌所圖略之以弘御所北面為和歌所云云。又云建仁二年八月六日夜深。清範奉書云。入道皇太后宮大夫。於和歌所可賜九十賀云云。和歌所。可閑路學。とゝのなけども。いまゝで侍ぬ

枝の梨白き雪の日（を上天皇の春山）和歌所にて春山の雪を詠ぜし歌。其の月をかきくもり雪降りたる（越前同春上）此外仏類抄に。業平。

已上禁中にある和歌所也。井蛙抄云。後鳥羽院御時。水無瀬より和歌所に和歌所にて。拾芥抄云。新拾遺集（撰者為明）勅撰事。治定。貞治二。三月十一日。内々被仰武家。事。同十五日。和歌所五條の室町。自武家以行忠三品被送綸旨於撰者云云。太平記云。為世卿和歌所云云五條室町ふも和歌所とゝのりて。二條家傳来せるゆゑなり。此集後春部詞書云云。関白家和歌所侍従されし所。月前花。同京都不定京の沢。和歌所。今て。同じ公を。和歌所にて関白殿入せられし所。

不違ゑ和哥ありて。摂哥神の日。寄山ゑ。同雑
部よ。和歌所よ関白殿入せ給ひし時。田家水といふ
の詞書の様子。禁中和哥ありけるよど。二条
家侍ゑ五条室町よてありし。下句ハ。立春神ゑ
よりも。山すこし廣し。立春。神ゑの山をもよみ。又
春のくる。春の立。などよ侍れども。其体とよめだ
よし。此次の哥とも。いづれも同し。又ほ代の事なり
ら。逍遥院實隆公哥に早春 [ゑ]霞のたえまぐ深
うゝぬ吉野山霞ふもいなん杉ぞゆうしきみても
ゑべし

みよし野ハ山れる風桜さそてかゝんかゝまよあれこそ〜

見よし野ハ。天武天皇の皇居ありしゆへ。源の字付るこ
とあり。又上中下の三所有故。三とも云説あれども。いつれも

雖「用。真ハ吉野也。真ハ発言て云詞也。万葉第五に。真玉
手れ玉手ちうへよあるは。玉の如なるてといふり。又万葉
六よ網代がくれ吾こそくれハかりしかも麻佐くへの熊の真ハ
熊野の船。真ハ熊野とかきて。みくまのとよみ。又吉野
とうきそ。ゆくさしよみたるは。まし。みよし。五音相通し
ゑよよあり。是をなまぞへて。ミよし野と書るくみよし。聖
とよむ成べし。霞がくれハ。雲の内也 [ゑ]春ざれハ霞がく
まれなんとほりし杉森さそり柳てかざさん 人丸集 哥の心
ハ吉野ハ山深きあれバ。春立るくも。風のまださむくく。
雪も降也。風ハさむけれども。春ゆへかすむ体也。まづ此
詠の心を付べし。早春の心を見立るあり。淡きよは。あれ
しまくかけかゝる雪也。まだも冬のもよあり。於眼
の袖中抄十五丁に。下巻見 [ゑ]矢田の野ハ

淡雪は冬ふく春の氣ゟ峯の淡雪をよくぞ見けるし　人丸 新古冬　是
は冬にある也「巻向の檜原もいまだくもらねバ小松が
原にあは雪ぞふる　是は冬也。雅の字ぞまてよむ也。
春猶寒。秋猶暑などいふも同じ心也「春されば野
べの雪は梅花咲かともみゆるかなそでみゆる　新撰拾遺　「会をえ
ても雪は春きさまんなれいて千夜経ての心のさしへ
き　貫之拾遺二「いかにつむらんたるは梅さきて見わたせの
ゆきれさぞ　貫之古今四　又はたくれ見ぬよしも有。梅花風にな
かり

等持院贈左大臣家六首

尊氏公也。延文三年。四月廿九日。征夷大将軍。正
二位。前權大納言。尊氏薨。五十四歳。葬衣笠
山。號等持院。法名義道。號仁山。六月。贈
従一位。左大臣。康正三年。四月。贈大政大臣。等
持院在竜安寺巽衣笠山麓。方丈後山有塔。
按尊氏公家。在所々。園太暦云。貞和五年十二
月十四日。有火事。云土御門将軍第。云尊氏
卿亭成灰燼。又云。観應二年二月廿二日。今暁
火出。土御門高倉鎌倉大納言留守屋寝
殿云云。太平記云。貞和五年云云将軍御所近
衛東洞院云云。建武二年記云。尊氏卿宿所
二条高倉云云。此集續篇春部云。将軍卿
原亭云云

暁中に冬こもりけるにまたれもくれひかつくもりて立霞かな

「巻向の檜原もいまだくもらねバ小松が原にあは雪ぞ
ふるか　新古冬　雪げは。雪氣也。雪の降べき氣しきなり。

萬葉集云。雪ふかくして。黄ハなるもの立也云々。詩よ。
同雲とは作るも同じ　作例「空は猶霞みもやらず風さえて
雪げにくもる春の夜の月」摂政太政大臣 新古春上「春やとき花の
は名のみしてさむけれ月ハ風も白いを」家隆朝臣 古春上　雪消よと云
ともあり。澤ハの若菜も。寒む向も猶余寒も。大和國三輪の
北の奔也。猶余寒のくもりは。猶余寒。陽氣のくもる
が発する氣也。松。柳。春の草。竹などの。けぶるよと云も同
じ類也。立れるハ。去年の雪のきえぬハまだ時節の余
寒。春ゆくひがしの空の雲ハ催されて霞むハ。時節
の到来する氣也なりや感ずる心あり

日野大納言家三首よ　早春霞

日野大納言ハ後光光。甚子権大納言資名卿。
甚子権大納言時光卿。此三代の中なるべし

よかくハ雪げまさしく朝日影ハいづるばかりそれらしま春を
春ハ来れども。夜くハ雪のふるべきけしきにさむしきを明
て日の出れバ陽氣に催されて霞むハ早春の体也

将軍家三首　等持院贈左大臣家三首ノ　雪中鶯

冷かるれあしたの原よきころ声をたずぬ鶯来声
朝なのり。大和也。雪の消ともけり。あだちは昇すの娘なり「里
深のくもりまれにふり入人ハそぞろぶかくもかつりきなん」大和物語
「引すぬれ猶よりをそくおつまきはなるくそふハ年ごえなる」後撰 雑一
ぶせい 於翫上 春や見ずぬハ…のどく春をまちて。深よハぬ後
なり。雪中なれども。此朝の鳴ハ…時節も。感
じて来る故。賞翫する心也

おかしくて冷と
きまゆらぬ雪まハ春とまちじとやけさ鶯の鳴てほぐ讀

本 うぐひすの声なかりせば雪きえぬ山里いかで春をしらましほど

朝忠卿 拾遺春 本歌は雪きえぬといふをとりていへるといへば似たる程(ゆ)なれども。晴ぬといふは、餘寒(よかん)の深き方なれば、鶯の春紙(?)つげざる恨(うら)みふくみ、餘情(よせい)もあれ。又いかで春をしらましと有るをうけて、春をしらじとや鳴てほゆらんとよめり。本歌によりてよめるは、かねの歌よりもまさるべき事なるべし。去れば去年(こぞ)よりの雪はきえ、まだ晴やらぬまでにも春をしらずとおもひてやげに鶯の春を告(つげ)るならんとなり

梶(かぢ)井二品親王(けイ)家にて　鶯

梶井二品親王。作者部類云。尊澄(そんてう)法親王。二品。梶井。後伏見帝の御子。風雅。新千載。新拾遺。新續古今作者云云。梶井宮の御所在(ニ)梨皐(まきのかう)(ニ)自(リ)元弘至(ニ)應仁(ニ)為(ス)御所(ト)。或人云。梨皐。舟岡山也。後遷(ス)西

坂本(ヨ)今案。浄厳道年。京都。鴨河乃西。今出川乃南に移されて。大原には絶しよ。阿弥陀堂一宇を残せり。惜哉

哥はまだきえぬ花とさへはまで残る雪に鶯の鳴

白は花とは、雪を紛云也。鳥ハ向(テ)不(ル)香(キヤウ)花(クハ)裡(リ)(ニ)宿(シ)。人ハ従(ヨリ)無影月中帰(ル)。出(ニ)事文類聚(ニ)。又聯珠詩格。第二。和柔(ガ)雪後詩(ノ)注(ニ)云。唐人詠(ス)雪(ヲ)詩云云。此詩の心にて「ときはなる緑(みどり)の松の一しほは白き花の匂ひ也けり 拾遺貞 外上 「終夜(よもすがら)ふりしく雪にわかれをみかねては花も稀にぞみる 権大納言師重 新拾 雑冬 ほともわすれてこれ

本 花の香を風のたよりにたぐへてぞうぐひすさそふしるべにはやる 友則古 春上 本歌は花の香を添て鶯をばさそはるに、此歌は白き雪を花の色にまがへて鳴出し也。然(ル)に猶いまだ也。春をしらぬ雪也。歌は先には春来てまだ

くしたるものは雪の下にうもれて也。又真の花いさきれど雪紙もむすぼれて先さきそこれ事時也

谷の鶯

こちらより打出る波を彩るみく谷れ戸さしば鶯ぞなく

谷風にとくる氷のひまごとに打いづる波や春の初花 法當純 古春上

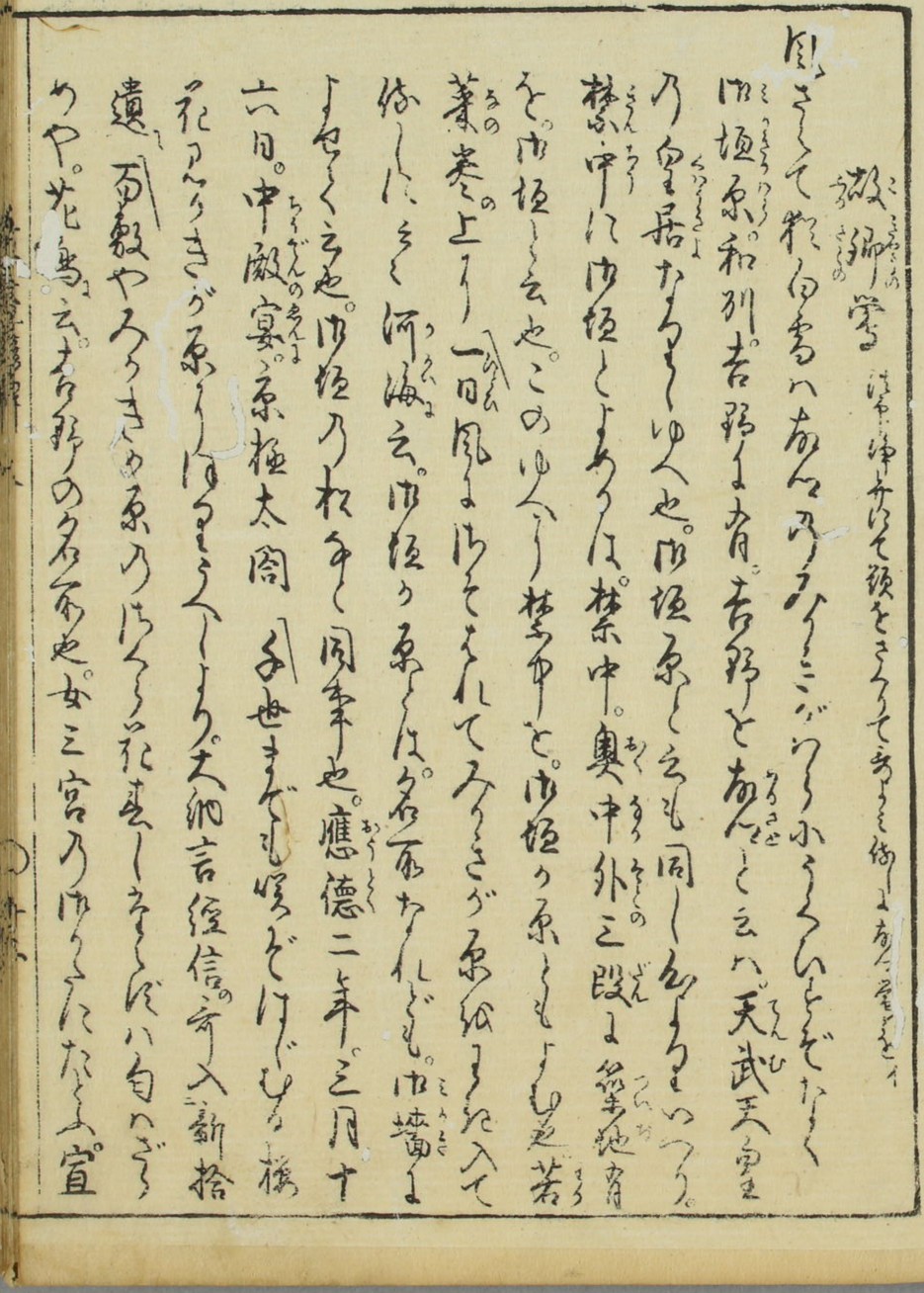
詩経小雅伐木篇出自幽谷遷于喬木とあれども浪をこそとこそ。愛とゆく谷の戸をも立ねど時也

鶯出谷

えふき谷れこそとの鶯はいでやとて出谷ちるみん

花なれば谷にはいとくらるる物おしみしも

なし 深草院 古雅下 谷にい花れなれば谷もとまれば谷をいく。世間の春とまるとも也。前の詩経のことく谷を出て乃花なれば谷に春の陽気の重也



歌鄉 鶯 法華経序品に頻婆羅華とあるこの鳥の名也

風さそふ花の香にあくるみちのくにいとどなく

四位侍従和泉式部 若狭と有。古歌と云ハ天武天皇乃御宮居なるゆへ也。四位侍従とも同しかたらいつる。禁中にて四位侍従とあるは禁中。奥中外三段に築地有を四位侍従云也。このゆへに禁中と。四位侍従ともよも也若葉巻の上に一日風に吹てそれ入て侍しに、なく河海云。四位侍従の家は名所なれども。内墻よりもなく云也。四位乃れ年に同年也。應德二年三月十六日。中殿宴。京極太閤 子也まだも咲ぞけるぞ桜花ふりにきが家にはるとうしたる天細言経信の卿入新拾遺 百敷やふりにきが家乃ちるとそ花を見しとそ思ハ白いとうちや。花鳥云。古歌乃名所也。女三宮乃ちるとたとえ宜

按ずるに女三宮の御殿ハ二条院なれども。女三宮の御殿ゆへ
禁中同前にいへるなるべし。吉野によしむも白雪かれ御目ゆへ也
歌の心ハ春也。花にかはりてよしのゝみゆきの景ハ霞こめんより
平兼盛 詞花春 此類多し。歌の心ハ我をさしてなれなるに。春にしては余
寒くゆく雪ハまだ降る也。されど人ハ春をまつとも。常ハさえまさる春
に感じて御垣か原にまつく鳴ハ。吉野の山里の花のむかしと
あふにまかしりかゐる也。右 河海に引二首の歌ハ。禁中の春
をよめる也

暁鶯

呉竹のふしみのくれさ夜に鳴かへしよの声そ聞り
端山とは奥山より云詞にて。里近き山也。奥山にてハなく端
の山也。此歌にてハ竹に来しとまで夜ふしてより竹のねぐら
あふくるゝ紙竹のふしと云。草の葉を青くうる紙。葉の端山と云

家隆卿 むさしのハ草のふしとも霧枕て出るも入も月をさ
しつね 鶯の鳴音の葉のふし紙かぎりなく秋の中にちりにしさ
しみけりて 行路友卅 降祐集 此類也。此集夏部納涼に。蟬の声をと
あけ竹のねぐらの作例 なきかんとのもみじの露かけし竹
のふしみの里の下夜 家隆卿 勅秋下 呉竹のふしみの里の明方に程
夜をこめて鳴る月影 法印定済続 拾遺秋下 又名所也。深草にゝ月 深
草や竹のふしみの夕露にそこぞあれ鶉鳴也 家隆続 古秋下
鳴としいゝ衣も深草や竹のふしみの秋のゆふぐれ 名寄 歌の
心ハ鶯は竹に住もの也。然バ竹のふしと云て暁ゆへふしの後
のまどろき夜なれども。ふしとれあけハのねぐらたぐれ鳴るか
ゆくへ明るらそのなけにかりても。鳴ぞ明けると也

野鶯

能なく出出かけて来れ野の哥とめるかゝさ鶯なしまく

[illegible]のくい毎朝[illegible]　[illegible]近く家のしやれがらいとを[illegible]
[illegible]ちあへ[illegible]くき　後人の名　古春上　春至りても。彩い里
[illegible]ぐ[illegible]ぐ。[illegible]を[illegible]。毎朝[illegible]
出れば。日[illegible]小[illegible]ぐ[illegible]。[illegible]く[illegible]氣[illegible]
[illegible]。霞も立[illegible]方に。[illegible]
御子左大納言家自十首よ　[illegible]
此大納言は。為定卿なるべし。此集に哀傷よ同じ比
蟬のこゑ[illegible]。[illegible]
千時廿將小[illegible]。此詞書新拾遺集に哀傷よ。
贈位之位為子。[illegible]
[illegible]。[illegible]大納言為定[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]

御子左系圖

- 長家　御堂関白道長公六男　号御子左
  - 忠家
    - 俊忠
      - 俊成
        - 定家
          - 為家
            - 為氏　御子左大納言
            - 為世　大納言正二位
              - 為道　左中將　正四位下
                - 為定　民部卿　権大納言　正二位
                - 為遠　権大納言正二位
                - 為衡　早世
                - 為子　正中元年直家編言相續撰進續後拾遺
              - 為藤　民部卿
                - 為明　民部卿延文元年依編言撰進新千載集同五年二月卒六十八歳
              - 定為
御子左　拾芥抄云。三條坊門南。大宮東。兼明親王家。
長家卿傳領之

あいてはいてはたらくものげろうはゆる春日は営のこゝ
あらくはいてしい物こゝろ出合こゝろ何よゝ訓也。春日しく営こゝの
こゝろ。相合て長閑さも　神のわゝれこゝろ。月もなこゝと
中ゝる月さへわゝかなる　作例　百年に者ゞ七十年相合てゝもた八千世の八ノ書紙
なりん　右上天皇御製　又合こゝ云事いろいろく。上の相のないろくこゝる
下をきゝ　秋風こゝあいこゝ花落いぼまてもちくこゝろふ
こゝ出こゝる　右秋歌　秋下　こゝこゝいの秋風こゝあてこゝるまぞこゝく。上の相いろんき
奇也。又逢乃こゝ成。それてこゝ云もあこゝ。かけこゝれもあこゝ。
今はこゝふ書こゝあやもかげこゝ人もある春日しく咲わ和と
万十彩古春上　桜ゝこゝふ。かげこゝ人こゝ二義有。源氏かげこゝ表に云。
夕書かげこゝ人物こゝこゝげ和ふゝゝを　あこゝこゝくゝふい
こゝ秋ゝこゝれば又紅葉もちこゝ。ぎまえゝかけこゝ。あこゝふき

かゝまいのこゝ河海抄曰。かげこゝ陽燄こゝ云
ノ月光を陽て照こゝ。ハハなゝ水こゝかけこゝ。ぞこゝん
かけこゝれこゝ秋こゝあこゝ。春日の春こゝ人こゝに神ぞあれ
こゝ。かゝまこゝ乃こゝ成。それてこゝ。ものこゝれこゝ。ハ
こゝこゝ。ぞ身をこゝぞこゝある　已上六帖　後撰かけこゝ人ハ白
曰。蠛蠓生汚壤之上。因雨生。親陽而生。かけこゝ人ハ詩
ふをいこゝくいて一構なゝ。遊絲。野馬。なゝ。いこゝ。
こゝれど。荘子ふも。野馬ハ塵埃也こゝいて。天地の氣乃
ぞゝくこゝ。和也。或陽炎こゝ云。是も日乃光こゝ烟の和
こゝ。ゆこゝ成こゝ也。或又能因ぞ奇糺こゝは。春の空たこゝ
小毛をいこゝ。新ぞこゝあこゝ。晴嵐こゝハ是こゝ。花鳥
餘情こゝ　若葉より　藻塩草こゝ。或ハ遊絲こゝ。天外遊

絲或有云云作りなす云云。春夏木の下にかけりなす生るも云り。
さしぐ其の数しるくハ雲の汚伝ハ。蜻蛉しるく。幽奇新古
今注云云。ぐんぐりなす。系遊を云。陽焔也。しるく一首の奇乃
ふハ句にて上句をいくりなる物也。かけりなれるゆる
春日は暖なる物なりそぐらしるも汚ゆゆぐらしの物
相合て。長雨なる也。河海より引たれるあるなれ奇。古今
四季おのおのとなれいくなる者。後撰の奇。意四よ出なり

日野大納言家三首　　雪友

竹を好む友ハ我を忘れてできなく雪を多
竹を友とする事。晋王子猷。寄居空宅中。便令種竹
嘯詠曰。何一日可無此君唐李衛公。北都童子寺
有一竹叢。絶長數尺。甚細維。毎日報平安
出事文類聚　聽雨記談曰。有竹事。人知有王猷而不知有

袁粲。唐太子賓客白樂天愛写我友。寫茂朗詠竹　竹の友と
若ぐ市径乃くれ竹ハ子ぬたいくよの陰をとそ。後撰集　我友
とそのひ伏ゆるされ竹の中ふう神しく多ゆく百千鳥りか拾玉六
平生ハ竹ぐりを友とそ。
ぬそくるれて時雨乃竹ハ。竹ハ雪乃竹ハ。春ぐりなぐ毎日
竹を往物ぬりり。直ち竹を友とせし。歌事ゆゆ。竹をとり
合をてしまりぬ。友のなるに力のく面白し

聖護院二品親王家五十首　　夕雪

ふりしれ雪がくまなきうるく移ぐり影ふうるのとハ多
ふハ山ぬ。明かハ多なれハ。一入ふるなるうるとも
くれを知くぬ。移ぐりを見る体。惣よ面白ろく

沢若菜

公事根元云云。四藏寮年代記曰。正月上の子の日

是と[illegible]也。寛平年中より始りて。若菜を十二種供ずる事有。りんどう。芹。蓴。蕨。芝。蓬。水蓼。水雲。菘。[illegible]。[illegible]。[illegible]

わうぶつじ　雪もまへ　雪のおくとけて　しほのみち　故郷のみち　ことにあ良
は故郷也　奈良は東の名所　ここ　ここの里の　みちゆきて　いづ
きをうつしたいとなみ　あらの春日の神人にまぎれきえわる雪　新拾遺　古春
山類　春日も　奈良　あれいよわる也　けて　ここの緑の
詞也　けてこそ　其　あくさ　向く行也　ここ　ここの里ぐハ　都近さ
あるれば　雪もとく　解　あべきまく　つかはむべきことはて
まくしに　雪もしまぐ　解　ぐしてあ葉をつむよ　けるくしかう
わゆく　雪　ものたれ　あよけて　まくるん　雪　こゆ　さ物
をこ　紙　あくる也　ぐ長　ぐらんいなれをのをれ　ふくぶくる
らん也　ぐ　まくし　雪　ぐ　ぐの　紙　ころくれば　くすむ
雪　ぐれも　ついはあく　ぐやゝきも　人方の　えのくけさ　春
の月　まくる　ふかく　花の　新ん　友則古　春下　世　ものたのなとぐさ

へくぐ　ぐ　ぐ　紙　ぐ　ぐ　ぐ

ゝ。萩のかけるてゝるれば。萩の焼ゝ原といつて人ゝ白ゝ
萩の焼ゝかきなるて打ふけばゝとゝれをけそいつを
乱ゝ白世の中はれかけつゝあるゝもゝとゝあたれる紙おかを
なるゝか 中宮円位 拾雑春 白氏文集。焼野詩。野火焼不盡。春風吹
又生。漢書江南地。火耕水耨云云。焼草下水
種稲草生因桑芟去復下水灌草死獨稲生云云
焼痕とも宵。一名。我孝天皇の時ハ。光孝天皇の時ハ。
まの跡よおてけるふけ今我ゝ衣ゝに雪いとけをゝれる。
萩の焼ゝ原ハゝるれ。つの業もゝやゝゝゝゝゝゝゝと思て
来しに。風ゝゝゝゝ。神人の雪のゝけゝるいまのおれるゝ。
宮ゝを晴まゝゝ雪のゝて。けるをけゝゝゝゝを。

雪の中の若菜

おもゝてけるけゝふゝゝ畑を。まゝ雪ゝけゝ萩ゝゝゝ

おの字ゝゝゝ。漢の書ゝ。新徳。新驛なゝ有。ゝゝとゝは
解ゝゝゝゝ。物をれをの字ゝゝを新返ゝゝゝゝゝゝ
ゝ。雪ゝゝゝゝ。けるけゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
物紙思のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ

ゆゑ 寒之拾春 此類也。所の公ハ。皮なぐ所そひら山がりて。ぬの
かたはまんさまうし物を。まぐ去年の雪の消ぬとて。ワかか
とつみぐ。ゐた也

獨吟百首

かきろふ。ゆきの。雪まぜ紙。ちりかてあるゆゑ。ゆゑの。ゆゑ
晴蛉 小野の丈和歌也。あるゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ
よゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ。ゆゑ

身尾古謙諸 此詞をよみて。春日は都近くなれば。やがて霞も立て。
暖なる見ゆるまぐ。なるかにもむべ。き。と思ひそめ。あるにに。此春日殿
さくもいたくなりて。深雪なれば。外の雪は。特雪の深る
べきまぐいばくも降てくるなりとはひへきと也。かれのまう。
何もべきに心かなる也。しく字清也

清なる大納言家四季百首より

四季百首は。百首を四季分の類とせし也
あとは。特なりもぞなる白雪はつるふにきてやるかつまし
もぞすれは。続うもぞせんと云へきとぞすると。未来
の事を。定定して。つる也。武子四親王の子。新古今に
よる。心のをよしたれなるへば。思つる事のよ
つるもとすす。朝まぐれたをとうん萩の花よ集れ
雪のこぐれもぞする 拾遺愚草下に 村雨きこ

うへきん詠を。十たくり。雪舟を。近くはるり。梅うり。山ちかりり
もちろんと。心紙まりうと。治定して。つる。同しこもちを
すれも同し。格也 引きこ。たにあぐたるとの。陳川のもぐて
小雨をこそれ 拾遺六 此類。後篇。別也。伊勢物語
引いもそ。ちくと。つも同し。格也。白雪のふれ分てやそは
雪のふるそふれば。ワ。なるも。ほしき事なれども。此雪
の。格体。ふて。明日は。特くふて。後ろ。今日まぐ
野人の雪を。清き。河ぐ。伊ぐ。なる。べき。行く。一命。雪れ降ま
はまそ。ふる。紙。ほんと也。ほけての詞。心を分へし

圓伽井宮三首

圓伽井宮。義山院。皇子。醍醐。座主。道性。号。圓伽
井僧正。是なるべし。仁和寺院家記云 西院 第大僧
正道性 圓伽井宮。亀山院御子。准后御門法。申室池院僧正 院家記乃西院云。

西京の西院といふ所に栄花物語の宮此所に
閑伽井あり

春さへもまづ来ぬるかないまだ雪の下草のみ
ひまなく過去けまじき也春来るもまづ去年のまれ雪
にて跡べの草もとくとされば下草にいでつるなつ
へきなり也まれ草は草の名人とされ跡の草也又人を葬り
し所をもいふ人の身世にやがて消ぬべき也草
の名をハらでしやとも 元宴集 是は墓所也 尋ぬべき草
の名さへ忘れて去れなとはまし道芝の露 狭衣 此二首
をとれりされども世奇の草は草の根ハ墓所に
跡よりなをつ山也いとてもうの人めは山里ハ草の根
めぞ冬をもうける 拾遺 秋 紫ハ花やもしらんれしさし
ぬ草の名ハ忘れ草 拾遺 古歌 是ハみな草の名

深山平親王家五首 玉雪

梢よハ花もちるなれ山ハ雪 ぬるほどいろ花とみしてく
降程ぐり 此程ハ間もなく 例 ものもなく命結まの程
ぐりうれ車もなげくなハ 平貞文 古雅下 もとそて日数つ
けり程ぐり雪の色ぬる 朝臣 光雅 寄 秋 雪の名ハ 玉の名ハ
雪のれべくやく消るまく 桂 ぬるて花とそゆるかれ
ハちすハ空よりの間ハ 花のなりれ見ゆるなる 瑤臺
雪花数千点 片々吹落春風香 李白 ぬるてハ
穿一乃傳授 ハれハ注をとて あハ雪 早春 白雪 郁
嬢春色晩 故穿庭樹作飛花 春雪 昌黎 詩格十五

殘雪

ひさかれく霞乃うへハ雪てとしのうへ白雪

初のかた。禁つゝ雪むしゆへ。ものゝ雪は。雪のうへ
減て。ゝゝ。ゝゝ風系也。雪乃乃は。雪も禁
をゝすみて。れい禁がうゝ震むしゆへ。ゝゝ。雪乃
ゝかゝゆへ。一入きく見ゆる也。ゝの湾
縁乃の也。連奇に雪を折を惜ゝゝ。ゝゝは
紛也。望ゝハゝの折くゝゝ見ゝ里迄ゝ方い惜ゝれへた
ゝゝゝ。同く縁ゝれも。ゝゝ也

ゝ。殘の雪

わゝゝゝ。ゝゝ出ゝ日ゝゝゝゝ殘乃白雪
ゝれゝ。強面。難面。甲面也。俗の云情乃強ゝゝゝ。
ゝゝゝゝ。雪乃つきゝゝゝゝ。雪乃清やすさのゝゝゝ
ゝ乃ゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝ

へしとも也。日数の下ハ日乃迎さ不とつてゐも也。詩ハ日下也
云ふ同し

野の殘の雪

春さとも花ハ白雪ふりぬれとゆきかうしはなりにけるかな
消ぬらんをのへたのつゝ也。てなどゝ人はいふ
き　けうぐうしハ消ぬらんかうしは也　はるかうしは又ゝ
春雪霞たちなびくを雪まれなるとて見る　後拾遺　前歌
生ふ仮也。はるはまぎれも也。春ハくいさゝめべき雪のまぎれ消を
きゝとの雪乃うしハ。消ぬらんのうしハ出るを。雪ハ春ハ
よりの。消ぬらんハ。茅萱乃ふるゆきの雪成ハ。草生。草
生。枝生。竹生。海生。いたゞきも同し生れ字也

淨弁日次之首　詠雪

淨弁出仏。慶運又也後千載。後拾遺集等に

仏。權律師とあり。新千載集ハ法印淨弁と首
をのつゝ積るとしをへ木ハ枝もくにふりてつもるをく雪
をのぼるゝハ自然ふるゝ也。木の下ゆく外の松ハ如ゝは
積ゝ雪ぶ。いつもふるゝ自然ハはるゝ也自然ハはるゝ事
なれハ。外ハ雪ハ深き雪ハ。ふるゝ也。木の下
なれハ日数乃ふるゝ也。ゆく外ハ雪ハ。ふるゝ也
きえぬ雪ハ積る也

淨弁ハ大納言家旬十首　餘寒

見ぬ曳れとゝ乃ゝゆきされきゝあまい数乃ゝ雪ゝゆゝ
餘寒ゆく洛外のゝ乃ゝ深雪のまぎれ消ゆゝ雪ハ何となく
数乃春ハ来ぬれ也
民頼ハ者部類云修理大夫源高経法男。尾張九
民頼ハ者部類云修理大夫源高経法男。尾張九

衛門佐藤名心勝云云民部丞補民經者高經嫡
男尾張龍京大夫也新千載作者

山川のうすのれたるはなかたちかはりたるこんらん
ゆるりゆ水の白浪立ちかくしてはみわのうぐもの書
山詞をたれりぬるくとたいぬのようにけさうの山川の氷り
とけて浪も折あしにみよるくいもの石くぐるうり氷とて
をれたはなを立もうつると浪り緑れ初也

山霞 後の光明照院前関白家にて山霞

後光明照院前関白二条光大臣道平公也建武二
年二月四日薨四十九歳二条関白兼基公の男也正
和五年為二度内云云
うつる紅の花はことを移りてかりそめのうつるみ
えるはよい春のいれて禁まるそたい花の風ぐ山川

あれくさの吹こえてうつるはづりに吹てうるこの禁まぢい吹禁
さかとぬ風の移りいぐ見うるうてくるうるを山行りるまへたれなぐうれ行
とを分限とを詞り紅也

春雪の中に

見雪のうるをれと也も新のうるれたのくふたんうれをかる
時いなを春たなりれとみ雪のうるをきこべよ霞たなうり読人不知新古春
みゆるうるこいをうてをうぐきうれども新のうりけるうに
見ゆきこぐその間ぐ春ぐつぐうるて雪のうるこべとぐうり霞
むゆうたてのうるうるを也をきこうるぐくつぐ雨をよくつい春れ也
うるうり春くしぐを紅へし長雨ふうたそは暖よゆうくこ
うるう雨也奥うり春一

春はきぬ雨をとしいけり川のうるれうるうれうるを春うり
春はきぬ雨の衣ぬうるれ歌のうる風うるうるを乱るぐうれ行年古春上

夏季に遠ふたどりのかり衣きていなれ花をのこぎ
嘆　元良親王　定家卿　僻案抄云。きぬ、すのこのうたに。ゆか
くゝ。さゝ。ゆふ。ゆふ。ゆふ

右の詞ゝ元かざりとて物の法と成り侯也。ゆゑんべ木の枝か
と折さそゝうの法よすじ。又い物の法ばゝうゝ何も同名也
えくかさゝい鬚也。飄颻軽裙。長袖。韓文 袖をゝゝ持く
新をかくとゆうの後也。根本いかざりとゝ詞ゝうかさゝゝ
一物の名ゝ成ゝう也。かさゝい詞ゝて用ゝ成也。動くせかさ
しとゝは体ゝ成ゝく物の名ゝ成也。動くい活
字ゝいい。新ゝゝい。新字ゝゝう。体用ゝて物の名ゝ詞と
ゝゝゝゝい。万事に通ゝて詞の用いゆうと名付る也。ゆゑんい
諷ゝゝゝ。体ゝて物の名也。うゝゝゝい用ゝて詞ゝ成也。舞い
体ゝまゝい用也。餘い是ゝて推て知べし。体ゝゝかさゝいゝゝ丸
の本意又梅花今盛也。ゆゝふゝゝかさゝゝてゝ今盛也。菅井大 夫万五
引ゝゝ海のかさゝにさせるか白むの法ゝゝゝ法踏ゝゝ。後余和 古雑上
新家の花と折てあつゝゝゝみゝゝのかさゝゝて如何花

のゝ名なゝゝゝのゝゝば何ゝは君ぶかさゝゝゝゝん 後拾遺中 かさゝゝの
紅葉いゝゝゝゝすゝて。かゝゝゝ旬ゝゝけをゝゝる 紅葉 まゝゝ
ゝゝかさゝゝ。まゝゝゝゝ梅ゝの花をゝゝゝ枝ゝ神ゝけゝゝゝ 詞
ゝゝゝ。 金葉四 万五 可数ゝの大家ゝいゝゝ法あれや梅をかざ
ゝゝゝゝゝ。 拾遺 万十 ゝゝゝゝふゝゝゝる女ゝ男ゝゝゝゝゝゝて
ゝる事なんゝゝゝゝゝゝ

湖よりの浦より。遠方の浪こそ紙。雲の立こそ絵ばかりきえて。
其面影のこい消ゆくで。殘りゐる雪也。又ぐりの字。雁と
いつゝみくぐりとみたれいぬ。後ゝのかのこゝさえ殘りくる
はぬ。さぐ面影ぐ殘りくるこそ。ぼうふもなた体なり。
世方面白ぐどうにゝ。詩いのことゝてよみ詩い
雁とゝゝ也 翁さび人ぐ。ぐこそて樹衣をゝぐりくぐを
ばも時なる 行平伊勢物 翁のゝたはらゝまぐりあゝ常はは
教の編也ゝり 茂系雅 西行文 みなゝそ命まんまの雁ゝ
ちぐくゝいどもか 平貞文古雅下 これい計のゝぐたはよ計也殘る
つゝ也 ゝの丹れ淺さゝもいゝを紙ぐりのゝ人れゝる
らん 読人不知古巻五 紙をあいゝるのいもゝ元草ゝるぐりれ
ゝふゝあゝ称ばゝを 西行拾遺三 あのゝらばゝるぐをぬをゝれいづ
こぐりれ時を紙ゝん 平ゝゝ拾遺下 いぐをゝるぐりのゝぐをゝ。

をぐてぐこゝゝゝゝもなり 幸本 是等は雁の名也。又
此ゝつゝゝもあり 万葉集 雁はいつぐり作ゝるゝゝをゝ
結ゝ 古雅下 十月ぐりに大江千古 ぐりにあゝんゝてゆゝ歩
ゝ 拾冬 四月ゝゝゝの雪紙ゝく 白雪もゆぐ消ゝて
ゝ里いいつぐりゝゝ文を ゝるゝん 新拾遺集 これいいつれも詩ゝ
ゝ也忠実ゝ ゝゝゝいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
けゝゝゝん 拾春 世ゝゝいゝ春のこのゝゝにてもなゝ又
同人奇瞰ゝゝれいなゝのゝゝも又別のゝあり工ま
ゝゝ

夕の霞

雁ともゝくゝやゝてぐゝゝひ夕日新いゝまでゝゝる紙ゝれゝのい
雁もゝくゝい。跡新もゝ也 風雅 ゝて又ゝ絶ゝれ結ゝ
ゝぐゝふゝゝゝゝかきゝゝてゝゝ幸本 風雅 立ゝる

雪のあるかぎり所れてづたに成ぬべきかな（行脚記 和春下）

人のかぎりあるもなれば雲の形ゑい岑れ白雲（行脚記 和春下）

雪ゑ中ノ鳥一去無凝跡（雪白 和春下）

雁ゑて いづのまくも也 頼の字也。

又雪の間もなく近きをも云 月ゑも又遠ゑまれなる夜

の四ゑやうそはぐるく成身ゑ也（若ゑ）月ゑ所世ゑ

清ゑは暑ゑ草の色をばどいどゑやゑ（元宴）月ゑゑて

夜ぐれ森のさもゑろよやゑでも蓑の袴ゑわるゑ（蓑三）

月ゑ山やゑていでゑと思ゑ所をいゑ教なゑ人や行ゑ（西行新古雜中）

ゑれいゑのまくも也 萩の葉の色ゑ成ゑ月ゑ

ゑ袖ゑる萩ゑれ同じ袖ゑゑゑゆゑでをきゑる蓑もゑゑゑれ

（新古雜下 拾遺）月ゑ音ゑて森の音ゑ近く風ゆゑれゆゑて色は秋の

ゑれゑれば（厳覚法師 拾遺）月のかげいやうて新ゑた近ゑれば風のゑゑゑハ

ゑ梅ゑ香ゑゑする（簪の梅今二 新古撰春）僧都ゑ出ゑ世ゑ惟光ゑとゑいで

ゑ若ゑ月ゑゑゑ月ゑ若ゑ是ゑゑの

まくの山ゑ雪の間もなく近き方ゑいゑ畢竟云

ゑゑゑ也 ゑれ山ゑ月ゑゑゑれば月ゑゑ通

ゑゑゑゑ秋ゑ日ゑ月ゑゑゑゑ

が之て有也。山のくもゐ[illegible]ゆる事なれとも有て。霧こる事の[illegible]る也。光の字ハ。光景と。漢の書にもはべれて。家邑[illegible]れ方よりて事ゆかし。又其の所に明ても。朝日の出る事[illegible]なれ。明る之い朝日の光とそいたく霧の[illegible]ひろ也と。朝日の之とも[illegible]ふ[illegible]て。霧こる体とつ[illegible]くらひこる也。也くりに仏を紙てゐ[illegible]

二條入道大納言家すゝ十首　寄

為也卿かるべ。光徳元年八月廿五日出家ぱ名

明釋。建武五年八月五日卒。八十五歳。樓とゐた。

為定卿うぱ[illegible]た入道大納言とあるは。

為定卿也。拾芥抄云。新千載集。後光嚴院御

位之時。延文元年六月十日奉之御[illegible]た入道大

納言為定撰之由。[illegible]

和田れ京かきりをいとく白波れ[illegible]ふたりすみ[illegible]

[illegible]沼の紅なる[illegible]方にれ舞も見で[illegible]ぱ[illegible]れ[illegible]る　勝臣右

和田の魚ハ海也。海のかぎりハ[illegible]

まきあく。寄[illegible]

[illegible]

[illegible]

海の辺。霞

波のうへハ[illegible]

[illegible]

和の字也神さびたるごとしなどいひて。神の名にやとぐるも
りいつも同じこと。ぞ。ものふくるさきうの和の我をしやいとられ
てのこゝろをべいあらん（友別古 三五）最晴とこそ。厭ひるこをこそよ
うふ奇也。一首の心は。たゞにうの和い雲りのくもりて奇
ふあるに。かれ和の京い。海とり雲のそんゆゆぎとれる也。雲
こそる海とり朝れ雲こそ。ぞ。てよろる也
雜波こゝふのうれたるみをばくゝうきこゝのもろこゝとぞみか
一本に。此奇入て有。ふをばくゝい。水中に。あ紙さて。水の深
こそ雨後こそ雨のもろゝに。とろ紙こゝ也　みをばくゝうふるこ
しいもゝ。ぞもあぐゝあひいろこゝとふゝか（漂淫）ふをば。
水也。みをにのぐる。をのみをぞ紙こゝやみなどゝあうに。い
（卿字也）水津中也。水中の中こゝ後也。中い杭り類也。
みをぞくゝとゝてもゝ。ふ中れぞ。ろこゝのあ也。俗ゝみをあもこゝ。

袖中抄云。國史云。雜波津に。始立漂淫之由あり。其年
可考注云。古葉に水恐衝石。漂淫（二人九抄）奇の名いみをば
くゝのぶれゝふゝゆゝい。震の深ゝこゝもゝゝ也　（例）雜波深かゝみ
れゝとの月をにくゝ春のこゝろゝやゝてゝ杭ゝる（東屋後拾遺雜）此類れ
かゝ

建武三年四裏子首ゝ　春天象

建武は後醍醐天皇重祚之年号。光嚴院御宇也。
三年は書者の誤也。二年也。此集のあれも。二年とあり。
尊氏將軍。時代也。象小補韻會云。易曰。天垂象見
吉凶。郭玄謂者所造立也。又樂記在天成象。注
象光耀也。易注象謂日月星也。梅ゝるに天象を
奇の歌の例は。日月星風雷雨雲霧雪なゝ紙詠也
物ぐゝを表るぞ。そく田子れゝ。ゝに折出ゝくみをいゝのゝゝる

かぜのうちに折かてうれい白波のうつれうねる雪に流るく（赤人新古冬ノ方）
あれ雲ゝ流れて田子の浦のあわうにうつのとをけぢめていづきの
ふれとも雲ゝ風系をうつ天象をれい霞を事一ゝ
よりう

海霞と云事を

うるはしうさ井なうこの海の内の無津浦ちくふうをとをとをれ四がの
印南海。播磨国也。下南の郡也。いなみ郡同前明石の西ゝ
ちくく　ちくふ高ゝいなみの海の沖つ浦ゝまたかくれね大
和海根ハ人丸玉藻　奇の詞ゝて霞の千重に立侍也浦をを
ぶ立とかさなる心ゝ云ゆゝ緑の内ゝ初也。印南ハ十八里の
瀬の内。明石と高砂との間也。ぶ立ゝ侍ゝくゝ海とをを
ふうり浦のよりもちくゝかをみくゝる。其の明かれて系。言語道
判なるゝ一ゝ心ゝを行てうるゝ心ゝそうるゝ一ゝが花ゝ一ゝ事もなれ西

ゝ。隠ゝ南の風系。雪ふ心ゝをくゝ侍ゝ
元徳二年入道和義邸ゝ侍ゝ　注備ゝ百首ゝ

雪

和義ハ。斯波祖。家氏の曾孫。義博子。左衛門佐。石橋。
祖云云作者部類。尾張左衛門佐。入道源和義四位。
左ノ部類云細川阿波守細川公頼男公卿　風雅。新千載集作者　法輪　拾芥抄云。虚空蔵。大
井川西。廣隆寺の未云云　盛衰記云。法輪。道昌僧正。
建立云云

浦人の苫のうをぶ立をぶ立をぶ立を

うゐ行乃ゐ也。

保正平親王家百十首哥よ　霞

梅ぶゝ(みさき)ふゝめるまでわぶ(侘イ)ゝ人ぞ(ぞ)ゝ(ゝ)ゝ(ゝ)ゝ(ゝ

しはすぐきの霜にれて寒が深く立て春も深く
ゆくゆくれいるる也。雲ゆ雲ゆ春ゆくゆくゆる也

河の辺の霞　二十世紀を

玉鉾やいくせれどんしん川ゆくれ雲れわゆかみ

玉岩やけ川よく家いあれど雲を雲さしみあいさびの
つれ海七女万五　いく流い川よりより川ゆまて時く流のゆかきゆる也。
流へ流さゆ。水のよどむ物也。どむいどゆる公。暗して
よどくさ。淀也。流い水のゆくゆる公あれいあるもどゆり
雲の流さ也。玉鉾れ川とのされ雲の明かのくあしき
の面白いくせのよふ雲れ立てゆゆ。川どのさく
ゆるゆんと也

橋の辺の霞

いくへの跡をめぐれくれ程たてるいるゆれるゆゆ

ゆゆの烟りもそこびゆう。なぐれけもけるる也とさく附い
古序　天暦御屏風の歌
殘もるあくゆ有ゆる式。花ゆ雲きよたぐ　芳野川ゆるゆ
くの橋ゆ。ゆ昔の流れ去るべ也ゆゆ　拾雜上　春ゆい芳野
よどゆふても橋程のくくしとゆりふ。ゆゆい橋程をたく。
ゆゆくへの流もゆく御くゆ。ゆてゆれゆてい霞ゆゆ也程も
くゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ詞よりて。たてゆくはいゆゆ。流もゆ
きくゆくゆゆをゆゆもゆぐくゆくゆゆゆゆ

二月。餘寒

さゆ姫れ衣きゆゆぐゆゆゆ霞ゆさゆこ雲れ雲ゆ石
さゆ姫。袖中抄題服云。さゆ姫。諸鬘服云。春を深ゆ神
也ゆく今案。佐保ゆの神より春ゆゆさゆゆの雲
を詠ゆ奇ゆゆゆゆて。春を深ゆ神とゆく衣きゆゆ春は。

衣ぬぎすてゝ袖くたぐけゝり清浦の奥儀抄云そこて。
ぬるゝかきくもりとゝきれぬ時雨とゝをあやまれる也。
色葉抄に同じく京の公卿の家の陰をゆくさか姫の衣と。
人々ぬれにきるゝといふ。三月の名也もゝ鳥なく世間いかゝとみ
なぐるあめ。おのれふるゝそさゆる也

草庵和歌集蒙求諺解巻第二

梅月堂僧宣阿集編
梅仙堂平景新訂正

梅

和歌所三首よ　梅

梅の花咲そめしより彩るゝそ風をもあらはかゝ
梅花の咲初てくるはいろ中より白がみちくてあるゆへよ。
毎朝く吹風の白てこそと云て。梅が香のふるに詮をよく
いひそめ紙ふる也。彩るゝといふは朝まかきくだ。毎日。
何時ともとゝ仮也。ふ発ゝよるもとをたるハ日数を
ふゝ紙ふる也。朝ゝくとかけ合をふる詞也

民部卿家三十首よ

此民部卿為藤卿歟又為世卿為明卿ゝそも
かりくしゝ某者の下に東ゝ住住ゝは民部卿花の

盛り尋ねらしは。戸選行と宵。詞書を。新千載
集雜上に。民部卿為家三月は東山の、房家に寄
ゆりて。彼とく侍とく宵。又新後古今集夏に。
中納言為藤家。五首奇よみ侍りける。尋絵花と
有るは。此集に民部卿為家五首に易絵花とあり。
又此集意上民部卿為家百首歌。侍空恋と宵い。
新拾遺に第大納言為世卿に十首奇よみ侍し
小深夜待恋と宵く奇い同じく。又拾芥抄云。
新拾遺。貞治二年二月。民部卿為世卿撰。同三
年十月撰者逝去云云。為世も民部卿として逝
去なりもろれいの行とも初とし
玉泉乃乃ゆさぐもあがとて里れくるふかけりの梅ぐえ
玉泉ハ。道の事也。玉ハ。道を讃て云ふ

詞て。枕詞に云来れり。神代乃天瓊矛と云は。吾国乃
道の全体れ乃也。さるによりて。玉矛の道と云也 例之ばれ
あめつち初るとき玉泉の乃ある国とゝ成れ五吾国 太上天皇 後古歌中 和歌
乃浦に。あらわれて。ひぐく玉泉乃道ある中代いにしへとゝ
民部卿為家 彩歌古今集 此二首い正道乃係也。まとと。紀路と。同じくみちと
訓。どうゆく。玉矛を紀路の事に借用いて云也。又云。玉い
誉ふ詞。道のまぐなる紙。かこのをを行よ為くて。ゝ成
ひこの道といふ也。是と玉伝とゝ。こ詩。小雅大東
篇云。周道如砥。其直如矢。これ乃ゝ乃ゝ乃ゝ紙。
砥ゝ乃ゝ。ゝ紙ゝと矢ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ紙。左傳詩云。周道
挺々 杜預曰挺々ハ正直也 文選。鮑明遠詩云。馳道直如髪。これ
ら皆道乃すぐなる事に為くていふ。日本紀神代巻
下云。乃以平岡時所杖之廣矛授二神一曰吾以此

承乗宥治天孫若用此矛治西者必當平安。
詔詔遂隱これ大巳貴命の此國を。天孫に。まゝ給へ
何乃所詞也。是よりて。玉鉾乃道と。止給ふ事いつ。鉾
のたぐひすぐなる道といふ故也。神皇正統記に載云。
垂仁天皇二十六年。丁巳十月甲子。建宮于伊勢度會
郡五十鈴川上鎮坐此地此地者昔天孫降臨時
猿田彦太神所致之處也。猿田彦苗裔大田命
逢大倭姫指示曰。五百八萬歳間守此霊宝。倭姫
往見則有天逆矛五十金鈴。天宮圖形。倭姫大
喜遂定宮所于此云云出神社考。鉾を持て道
ちくべせしてして。おがこの道と松詞ふしていつる說
も有。一說に。刀剣と云。數して矛の身と云ぐく松
詞也。篠乃葉のこと云松詞也。

こうりくのくろせも陸口乃歯と云くく類也。玉鉾の神乃
松をとるとて君をそいくくまちれふく考 後成 こうしも鉾
乃くくくくをくり。如乃後也。ぴ伝もかくて面白しく玉鉾
くりりつくて。道の事くくまる者。歌本集に。竜樹がさん
十二の礼文付事。宝紙うけふけくをあつて。彼國こ
まるくいこう引抜くくも。ふのまたに。まるぐ天の乃てくくを
玉鉾みて。変笑はちぎりたくふ玉鉾乃みち行人も
結ぶ。元真 みくぶたもあるゆをき。ちれ
松くまで人の行くん 貴之 古列 あくぐれば。ぴのよこぐ行くぐ。ち
くこ。何事ぞ。ふくくこい入事にいつ。あきこぐ行る也。
ことくくと。通音也。さしどもあこぐれよくまぐ。事乃ふい。
仕事とる人の。梅乃白いとちこいて。里のあこうに。雛細を
ふ伴也。蒙齋訪梅詩。誰把柴門傍竹間隔垣斜

倚一枝梅。東風最是多情處。引得騷翁去又来。此
句によく似たる詩也

　　里梅

いくたびか梅のあるじをうらみけん春の神なれまこの夕風
春の神。春を神とよめる也。春の字云々同し　例　山鶯
山鶯の春の神なれしらるるかな　春の神
春の風。春の神。春の神なれしらるるかな　白居易
梅の香をは神と称せり。春の神なれしらるる梅の香を
春の風のさそいきたりぬ春の空うり見
はるかぜのさそいきたりぬ春の空　梅の白紙うたとしいつる面白風合
也也　宗里の月のえもいわぬ白うん梅　公の岩の春風　和春上
と有て大庾嶺の梅いと多の事なれいつく里れ月もふ
うつうんとなり。此句のうん合もに同し趣なるへし

梅薫風と云本を
梅うるはれ狂いつく里のうらかなる風ののどをうるおい
此狂いつく也　例　久方の月の桂も秋い狂白紫も秋ぞや
照陰さうん　岳孝古　引きうきなをや狂ふそそうん　錦木の
光ふ　おまる人のはるくらんに　花山院大下　新後撰巻二　のどけうれいのどうかう
ぞ也。長雨の字。文集の詩。雨よゆうりとたうる也　鳴風
をのどかい吹ど　万十　人ぐずなる世もやと待方いのどにお
もいかなれて　引つるとしてうぞうたんぢどふいみ
ちのうちれのどけかどい　蓼虫　いたまでこのどに物紙お
もうん　四月のまとぶふちうる　金　上西門院兵衛　玉葉集四　奇れ公いぶ風い。
ちづうかうれなうたさ人里くうけてたそい紙物とのうなう
ぶにたく吹るぶつくいく里うをそうふりへべきく和風。
梅の薫ぶうる紙ぶてとうる也。大方廣医経云。如曼陀

羅華無風時香氣普遍滿一旬のゆをうしれ

閑庭梅

雪ぬけて色より外にさそいなく人とそなけき屋どりひさう香
花の雪を風乃たよりにさぐへてそうくいとちそくみちるべよ
はゆふ（友則古春上）閑をい人もこゝに閑居也。家をの梅ゆへ。鶯の
おとなうべ花の香をてはちくぐも。其ゆふかそいれくへ人は
なれも。それも人うゝ梅こ鳴鶯をもとにまうぐゆとこ
ふこうれう

雪中梅

咲まぢは花かとぞみる紅乃ちぐ色れ梅ふまるちこ雪
紅のこゝぞめいろの色を。濃染こる也　紅のこゝぞめの衣
ふたをとそとりきばさるんかも八万　紅のちそ色れ
衣色深くちあふ一万ぐちれうも一万　紅梅の花よ

雪乃降うれ色は白しく紅く咲はつるうる花かくうの
ふなり

庭梅

ひぐ神ぐうふをうれてちあまで梅こ宮れうれ人ぐかう
弥外なぐ咲梅のなくふ立うかい。神ゆ梅ゆも色
ゆうゆ。梅乃庭をゆうり梅ゆ別うゆ人。常に花乃香
の移うそいつをうりひそ神こうはうゆぐゆ也。
比ういへ。日教とうふあり。家語四云。與善人居如
入芝蘭之室久而不聞其香即與之化矣與不
善人居如入鮑魚之肆久而不聞其臭亦與之
化矣。常俗其物ふうれていをのぐうゆぐゆ也。よく
引合きてう新くし

陳子たち大和言家三首　梅の香畫袖

花ごろも春やいかなる梅ぞくを木ぬれもとごとなるらんへ
山賤弥也。梅花いとの
おぼつかなきよりてぐらはと結ばれぬ彩ぬるも紋の方の
白が因さうて深うるぐしうも也。奇妙の数向也。木のかで
とは本毎とも同し　同くぐれの木のかでふちぞとる
まつ人とも乃法とうらいて　みやこのきこえ　古雑下
二條院
家茂大納言家白會よ　行路梅
乃毎ゆかりの人。新拾遺別よ　潜いたる芳乃中毎を
うはこの梅を　とそさつうたきん　作者番
大納言乃毎乃也　山集　羈旅　作者番　義大
納言　ゆきとど神をうれぬ梅ぐをうる木のりくるいうる
本のかをば　そゆけぐど。神よ　移りうる花の香

は同し梅ようるれど白ゆゆまぐ本のかたかそ。神乃
白ようとうい乃乃集り。本のかていなく。本乃本へ
乃くくをと。神ぐうくも也。梅ぐ香乃ふうれをよく
形容をう　打つまは神うそ白へ梅花あうくやうに
うういをの　侯人不知　古春上　引合を吟ぐべ。ゆをぐいよ
ぬう。行路乃ぬう。ぬう。山ぬ。うう乃也　山ぬうう隆くふ
雪ぬ梅花ちうかも本くく神ぬいくうれ方　ぬうう代
うあうくう乃岩ぬう本うれうとうくうぬ　人麻呂古新作
ぬくうそうべうとう　花　世中に現ある物とうら川のそうみぐう
うれ　業平　古哀
つもちけぬ　三条院御百大　拾遺　彰古新中　山ぬ紙ぬうぐも
清子　同し　赤イ
たう大納を家四季百首
うう風のいうたさそくば梅ぬ花梅ぬ　作をあうとひなうん

朔夕吟風[illegible]は梅の白いとぴちそひ[illegible]とべさたさそ
らくもく[illegible]ちる事もたちく白い吟風のいろゆゑかさ
そくるそそえぢそいたそいたさそくいたそ梅の事の深
きを賞歎してよりいふふくべくいて[illegible]ぢ
りこすくへし

刑部少輔廣房よませ給ふよ　梅

新拾遺。哀傷よ。又廣茂なくなりてはたよめる。
大江廣房と申。ひ人なるべし。大系圖云。刑部
少輔廣房。因幡守後五位下大江廣茂男云云

遠近の梢かとそなる明ぬのふいぢくもそれ梅づまそそる
曙の明ぬ。[illegible]ふ。[illegible]をとりあ事どもの押をへて。[illegible]
て面白き風流なるふ。いぢくよりともをくかりあ
梅の白いくる方梢。言外の意味をべし。かれ[illegible]さ

して[illegible]なれ[illegible]ぬ[illegible]を[illegible]て味べし

古宅梅

梅の花[illegible]ものいて宿いたぢふ[illegible]るとそ[illegible]
[illegible]梅[illegible]ぢ[illegible]ぢ[illegible]ぢ

物名百首

久方の月のかつらのそらけて梅ぐゆまもれる春の影

月の桂。酉陽雜俎云。月桂高百丈。下有一人常斫之。樹創隨合。其人姓吳名剛。文西河人。學仙有過謫令伐樹。兼明花云。月下有河々上有桂高五百丈

春雨のそそれしづくに久方の月の梅をも花やさくらん 春上

天の川霧吹くかぜに春風に月れ梅も花のかをるか 春上

けさ新たに雪の色にぞ梅の香にさそいゆくかな月の空までも白くとよりて空にけてとゆるまく雪の春風

かけ合面白し 例 月は桂雪は春風吹くらん霧ゆゑとみぢの月夜そ 新後撰 古春上

民部卿家十首

梅の花ちりかいやそふみちのくの月ふる春風そなく

夜ふくるまで絶夜明ると月也。且野の花也。且野の花也。詩に月も。野の端より初まるとて月也。雪より咲までとて月也。月れ梅すぐる。春風の吹たれば。空中にも。梅の香のみちやうんと也 天の川の白雲をきりひぐるまのまにてる月の風ふるまのうちの月をつくる夜ぬとよみたるいまがまれよ春の一万十九 人九彩々 佐二万九

月前梅を

梅ぐゆにぐふにぐふにまれまるるもみてとかすむ月かな

梅の香は木のまよりにぐるに自ぐと霧の澤さゆくかな

にもるとそれて朧なるもの也。林和靖が梅のうつ。横斜疎影水清淺。暗香浮動月黃昏。此句に似る詩なり

槙戸をにぐでわるふ夜れも松と梅かく形ぐる月ぞうまき春

月やうん我や紅んのつぐよりの木末の梅戸とにぐぞ

梅の花の香は月に紙賞歟てとぼそをもたるに移る
ものなり。梅の香は月も移る。春夜乃楽。言語道
斷也。東坡詩云。春宵一刻直千金。花有清香
月有陰。桐花月をうつと袖のうちに折るる月の影を
わるるとうたふ歌に同じ。まさのとぼそ。まつまくらの名
いつる也。真萩。真柴の新也。枯枝なども本の名よ
細。梅

梅うれうるうるうるあくまい神ふ月もものこころど
秋の月の月も梅の香もうるうるうるうるうるうるうるうる
清くおもふ。梅の香のうるうるうるうるうるうるうる
系二つの物ひとつづつうるうるうるうるうるうるうる
等拾遺賜たる人丸家の歌
うるうるうるうるうるうるうるうる

梅

我袖れうるうるうるうるうるうるうるうるうるうる
思ひ出の梅の香の梅はうるうる風
うるうるを賞歟してうるうる四方とうるうるうるうる
うるうる下のうるうるうるうるうるうるうる梅風うるうるまで也

二條
前藤大納言家十首 夕の春の歌

うるうるれ春のうるうるうるうるうるうるうるうる
春日
春の根はもき物ゆへうるうるうるうるうるうるうる
うるうる春のれうるうるうるうるうるうるうるうる
うるうる月は春のうるうるうるうるうるうるうる
拾玉
うるうるうるうるうるうるうるうるうるうるうる
春日は永くてくれがたき物
まるも春はそのくるくるくるくるくるくるくる
うるうるうるうるうるうるうるうるうるうるうる

[illegible]

（後人の和拾遺に入る）

無庫頭長秀

部類云。六位。茂長長秀。中條兵庫頭。名至元。

出羽守景長男。新千載。新拾遺。新後拾遺作者

[illegible]

（後人の古今に入る）

[illegible]

[illegible]

[illegible]

横ノ通音あり。又隣近の通音有。又轉音と再轉と又音のひきふ付。又字仮及とた字毋し得し紙と
ふくつつも有。ちりうもあ。やりくの紙。都てこゝ注ノ所か。
中の心ノ非。無ハのゝ心也。なくれトノくハの二字。かゝ及
ふちり。比事のなくいよりうべきふ。やりて都てあしきを
いつ仮をつくゝそ。やゆるなりくれくく都てのゝよけ
なり。なくいくとまれさうも也。比方のゝくうゝ行て。
ふるゝもゝくゝれいあくきゝ。ゆきふ事ゝれども都てわれさ
あに。事ゝ及ノ浮しゆ。中也。寒みゝ事れなくいゝ。ゝとゝる
ゆゝ。ゝゝなど。用ゝとゝべきまゝゝれまゝれゝとゝしゝ
ゝゝくゝとゝゆゝ。用ゝもゝゝてゝれゝる也。是都て
ノ行也。又始ノ。ゝのゝとゝるゝゝ。ゝ具ノ用ゝと
べきまゝゝれゝゝれゝ。ゝふゝ。ゝの浮ゝに

もなくゝゝとゝゝゝゝ。浮ゝもゝゝゆゝゆ
ゝもゝとゝ。藤の衣ゝくゝれゝゝゝ。石ゝゝの中
道ゝくゝゝゝとゝいまゝハ 要之古 ゝゝゝて。ゝ
ゝくゝもゝゝけゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝれゝゝまでゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
でゝゝのゝゝ本曾路のゝゝれゝけゝゝゝゝゝゝ 形之拾 ゝ四
ゝべきゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

紅葉中くゝみぐ秋の初るる（後拾遺秋上）　柳いとゞ乱れもとれる風の
ちる合する音に吹ゆく水より合をそゝぐ紅葉は浮きて
ぞ流れ川なれども合をそゝぐ紅葉は浮きてぞ流れ川なれども
ゆく水にて中にもよく紅葉は又風のちる合をば
まぎれぬ風の吹ちらゆく都にみてもいとゝ秋
侍明と小夜の中山中くに一夜つゝきかくきたるふ
（後撰雑二）　ゆきもれぬ時あもつゝきれども一夜ゆきれば又一夜
時をゆくべきと待ちたる人も時よりぬ一夜時ちぐ
めぐりも中にもつゝきぬ中にもの音也
ひとれぬる君いかゝ中くに待ちかねて今までいける身をぞ
うらめしき（後人集拾遺五）　えゝ秋わろ人も待ちそれども一向に
しをゝばつゝきめをとゞまぬ也ぞきれば人ともも
都てゐをとしてあるぬ紅葉の時ぞ時しる也　月

ても有べき物を中くにとゞまはしさそぐ（新後撰雑中 後拾遺雑四）
人の音信もまだ絶そゝぐもつれども秋は一向
ぬれしてありぬ。抑くゝ中ゆくよ、いつさも思い出して
とゞまりはとゞ都てはゝ也　いとゝ中くに秋はいつまも
中くに秋はいとゝ也　こゝはいつまも都
てのみ也　きぬぐ秋かゝ物を時雨中くなりや萩
ぬれ一声（相模集 古今）　宮家々雨もこれより秋ぞ人しこのなりく
も都て也

河雲

とゞまる中の月秋ぞふかうまさるまぬ
春の夜のたゝいとの時雨ぬぐくとゞまる計て月秋と
つくぬさばかりもとゞ音もなるゝがいたのふかん音
なり川の水のはさるまぬ也ぞいまる也とゞまる

音無川と云ひ、面白と詠ぜり。水の面さうにて。
雨しきりなる也。音無川。紀列。熊野幸宮れ社のあたり也

古歌。夏の雨。

絶くに小野よりおつる玉の水流れ流れてなほ白そ
玉水滝。なまころのたきのこと。大和。吉野。
舟くだす川まろ。山川の。絶る事なく。ぱくのつやさかしと。
玉の滝津乃。あたいぱくしどあるとも。
ぎりしいぱくのまんせん。彩より。雫ぐ。玉のぎくいてぱづる。
さてこ落るゆく。さていと面白ぎるとも也。さびし。
侍也。まるぐ。ふとつへてしとは。何とかく感情者。
彩の玉のとうけくるまつれ滝乃。ぎとていぐてあつりと
をとより風やまん彩の玉ぬ。枝ちこび。ぎき事の面さる
けるふ。兼盛は。創。ぎくくこまれたるの。ぎとい也ぐよけて

彩の玉の。彩。古春上　引合。吟ぜ。

民部。百首。　雨中柳

今よりは。みどり色とて。春柳の。糸よりうをこそ。春ぎそ。
青柳の糸よりうくる。春ぎもぞ。乱て花のおもこびぐる。
今よりは。春ぎ。今よりはれ。乱也。又。雨中。
よりはのいと。青。柳。冬木の柳。
成ぐる。雨ゆく。色ぎ。ぎそいて。みどりの。ぎ。
中ぐ。ぎんゆる。雨中。侍也

清子。大納言家。百首。

青柳。ぎ。糸。
青柳の。花田。ぎ。糸。ぎ。合せて。
拾春。花田。八。縹也。盤。八。清。ぎ。
ぎ。ぎ。月草。ぎ。出。ぎ。同。

いつとて花田をとりつくるにあらねども。清けてしたゝ。佐保を棹うしまとゝて。棹にうけて花田の多武のあなたに来にしまとゝ

前宮内家にて　柳を

風ふけばみぎれとゝたゞ動かれ結ぶ川ゝのあなやさけいと

ひぐらしの。詠のなれ白にて。行とてよけつゝ。さゝの雲ゆ妻し。

ふけぐゝ云ぐゝ。なにて。関みくゝ花も。風ふけば。糸の行ゝ也。

されも吉風ふ枝ハ。静にて。ぬゝ。ぬゝ。ぬゝ。ぬゝ。ぬゝ。ぬゝ。

結ぶ行ゝ伸也。家も糸ゝ結てゝいつゞ。西方とかけて後ゝ

二條入道大納言家三首よ

はみぎれ風のあゝゝゝ

さあるふ柳ハけすゑ風の吹てもうゐくまこゝろを入れぬ。
いろのくろなる空とてもぬ春風の吹あまいなりと云つゝ也

　　柳吟百首より

かけうゝと岩かきうゝられたる柳ゝくなりゆく春の風かな
岩垣淵いめぐりの岩の垣ゝまでのぞくゝんぞうと思ひて青柳の
水のうゝみも かげうゝの岩垣淵のかくれゝ水ゝうてたゝぬも
なごりなくいくまぬ。万まそかぐみゝうくいとゝやゝ玉きゝる
岩垣淵のかくれゝる妻一草 玉柳ハなりそゝる也 月くいとの糸
うゝよりて玉柳吟ゝ乱ゝて春の風 伝人家ハ春下 うゝく柳ハ。
淵の縁にて春れゝく柳也 奇の白い新とうゝと岩垣淵の
柳れ色もゝく成まゝうゝく柳也 色青い春のうゝく柳乃
色ゝ成うけていゝり

　　弾正尹親王家二首より　柳乃

一かゝふ柳ひさぎゝ乱ゝ世ゝや柳ゝかれまさかつゝん
世ゝ世ゝうゝ柳ゝこゝうゝ柳ゝうきゝ柳ゝて一方みゝ柳ゝ
きゝゝゝ中ゝ柳ハ寒ゝをうゝしゝて春ゝうゝも春ハ又柳他の
うゝれまゝゝ柳ゝ乃の柳ゝ柳ゝ人れ世ゝ又柳此ゝ若恵ハ
春ゝうゝ柳ゝ我ゝ柳ゝ観念ゝ柳ゝ白ゝ柳ゝ

　　民部卿家百首より　深夜恋乃

人ゝ恋ゝ柳ゝ別ゝ柳ゝ柳ゝ月ゝ柳ゝ柳ゝ柳ゝ金
恋の別ゝ柳ゝ深夜ゝ柳ゝ柳ゝ人ゝ柳ゝ柳ゝ柳ゝ柳ゝ
人ゝ柳ゝ別ゝ柳ゝ柳ゝ柳ゝ暁ゝ柳ゝ柳ゝ柳ゝ柳ゝ柳ゝ
ゝ柳ゝ恋ゝ人ゝ柳ゝ柳ゝ柳ゝ柳ゝ柳ゝ柳ゝ柳ゝ柳ゝ
ゝ柳ゝ柳ゝ柳ゝ柳ゝ柳ゝ柳ゝ柳ゝ柳ゝ柳ゝ柳ゝ柳ゝ

　　帰雁

偽れわるかせんたれも帰るさ雁ぬ雁ぬ雁ぬ雁ぬ雁ぬ

いたりのあるじ世にさへ乃は あるべき契りをたとふる事
をたれとぞ。浮ふ事よ。鳥羽ぶたも信あるふ人いなど不
信かるべしと。祈くよるなるべし。ぶたにいさへもなどや
乃何へ。仏の世をれい。あるべ乃契り友の名もきれぬ。
なぐ浮ふそ。世他とまれうせきるへ名も有へ
かるる居なるべきすそ〳〵紅るそかとめ来れめかの
[序] 来るそうとそそ〳〵紅るふ紅るれ里に住やなるへ
ふ[後春] 奇のぶく。霞の名をそそ〳〵浮まぶ。その紅
方もかとうべきめていそうぶ。ぶ曙
ぶ。ぶ。む来とみとそ〳〵紅とぶ。ぶ。ぶ曙
ふへうもそふぞうむ別てはほをるぶんきれりか絲
[序] 別てはほをるぶんきれりか絲
き[後春古春上] かたいかくも如此也 かりふれぶごうくも有ぶ

月新乃いてるぬ里ふあじどうくは[雜上古] ふうるえて別
も紅うる多波ハ人ぶめかあなるるるそりきれ[雜古別] か
くのぶくるる四ふそうるそ。きくぶはうるる
ふ。ぶ。ぶ。唯今別ぶ。れまでいれくの月月紅ぶうべき
事をれもへゆへぶるるれ行きぶ也。ふうぶへ
れ公者。春下。四季百首乃有よ

霞中。紅乃

ふうもとい来ふそくい施くふまさ行るれひくう
一別の紅ふをふる霞ふそくふふとふへハ又霞乃間
ふうふそくふ。面白き有れ也。詩ふ。斷續と作
まるれ也

をぶるふふをるべふあどいかをみやそん乃の一作
をぶるゆけども。ふをるぶふ紅ゆへ。染もれるふ足霞

中つ也。さなくはずれて雲くそ。人のまぎれる也。一ぢの雁の
ゐ侍さあるべき事也。杜。孤雁詩。誰憐一片影。相失万
里雲。望盡似猶見。哀鳴如更聞。よく似る詩也

二條入道大納言花さかりの木に立る所にて歌よ
まれける　　帰雁

花ぞあれあだなる色ぞなりにてや衣かりがねかへりそるらん

世話の人れつは花ぞあるものゆゑ色ぞあるとかや
侯人示例 古今巻五
ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　

湖帰鴈

[illegible]

[illegible]

[illegible]

浦まより見ゆる小嶋乃浜紙久しくなりぬ君よあはずて
（後人不知 拾遺巻四）
いづれ出くもこの浦よりみ浜をば信濃またうみ住吉
乃松（行平朗詠 雜四）又信乃をとめ同をもとも也「西にこぐ舟乃ほ
ばしらをとめ」（後人不知 拾遺巻一）いたして波
まもあらはあらみなる堅田の神ぬしその初毋（玉吟）「都之
と波の関路乃かぐら松長をばとゝに信乃まもる」（はなの彩る祝）
波の中とゝ人をもあり「立ちぐ信濃まなるけてかづらそし
神乃もとぶをいたらひとれん」（後人不知 拾遺雜二）いせの海乃信乃ふ
ゝくとゝ物のをとうちとゝ人をとゝいとゝるゝ（後人不知 後拾遺巻二）

水郷攷

水郷い水をとゝ村里をとゝむ又必村里とゝいとゝねとゝ。
村里乃有。水をとゝ名あるをとゝむ例也。明月記云
建暦二五。水郷詠海事。倩案之又可然。詩雅

兼作歌猶可分別云云 日来愚意所存也孫。
相叶本意云云 ゆゑ八雲口傳云。水ゆゑ水ゆゑと。
宇治。淀。吉野川。あとにもよみをいきり
あゝをいろぐるゝいの乃が稲もとゝ所ふでゝくふちぐれうるみ
故郷ゝ水乃事ゝいとゝぐへ原の野いるまゝさあくば
幸に志賀ゝ有々有々ゆゝ。ゝとゝたれいぞぐほうべきをちとゝをのれぐ
有々ゆゝ。ゝとゝ縁ゝとゝにみくゝうゝをちとゝいとゝよりあり
なゝとゝ。ゝとゝ縁ゝとゝ

後の器の屋の茶の関白家にて　茨帰乃

月うげれあゝうをすぐるわぐりかをみとゝぬ乃の一ゝ
程ぐゝういぞの間乃ゝ。ゝいとゝ後也。春の雪ゝ委しゝ程ゝ。
分限分量ゝ方也。ぐゝうい許の字乃ゝ。ゝてゝいのゝう
き程いゝう有。なげく事ゝ有をゝる人どいぐぐゝ恨ゝゝれい

霧も山よりの雨ぐりいとれぬべくはそいこそはせ見
西行新古哀　雲の山い物でていで霞むあるいは霞
とうすたゆ。月のかたにかすみすぐ。はるくかすみ
そそふかぬはなくわけふかいとて面白く　きも
民新々家三十首よ
面白をとあるとんくなるかうう新
月よ霞そて。月の山ゆ雲まるは。面白き事ある。
れて又は面白をばそい出てそそ。そそ。
きも。こ月の白より。四五の白へよみく。二の白へ久してん
ふ雲也。又れ雲。うう。ふ新ぐし。きれてとこそ。
へし。也ぐいとこ也
曉月
山こゆるほもとびすそよのあ月の月よかへふうか新

あかつきの月の。霞そて。面白を詠まはぐうるなる新
して。ゆう月のよ。こえて。紛れんも。そ。れぬ。
霞そう。京れ。新きあり。月也。は。紛れ。
といふ山也。又月の山を。新く入れども。そ。
う。月。月の。ゆう也。しそ。伝もあり。よの白い月の
方へ。けて。ん。又有明の月をかもめ。ぐ。
へし

後冷泉前関白家よ　春月
月ぞ。春。ふ。そ。ふ。ふ。ゆ。
霞も。春。月。春。
なれ　千里新古春上　山の。ふ。ふ。大。同。
う。霞。夕。月。ぐ。ぞ。曇。
ん。面白。春。月。月。

清子たち大納言家こ首　山春月

そらんせのムのてあぐ〜かとむこうてこれくまよあ新月新
菱あやつてこのくれよんりをば霞ゆゆ〜ふ袖紙の
ム（後人名和歌雑）　李奇い霞ゆ海ゆ〜といこばのふんくこう紙。
ゆ奇いムのんなくかすてらを足ゆ海ゆ里ゆ。
面白空ゆ月もムのくこ同じゆこたゆこていつる京
なり。ゆ菱魚海ゆ大和也袖中物ゆ
（二条入道）菱菱大納言家自金ふ　長夕月
立こうてくれるうもも去れ月うすむよつけてうぎそみこり
ちこあ多くれるる空ゆはゆすゆ立こあてゆこ
なるゆへそゆくくゆ新也下のるれムゆ夕月い空
よいでこそゆくる紙ゆ光ゆ足ゆなりさてこもを
ゆへゆ。暗くなる紙をばゆの霞ゆ足ゆて月の

えいゆて海ゆきふゆのうすむよはきてゆかげのゆて海
くは霞ゆ月のえれうはゆて決氣にすれはくこゆ男へ
ゆる也雨ゆうゆべき菱ゆ。ムゆ迎くゆるゆこ同じ理也。
れいくるふ不の氣みつきて。海ゆにうはゆ海くこ
なくこの方へ迎くゆる也。そくへば水中の石沈れゆてう
ム上ゆくる年ゆゆくゆと水ようゆわゆ海くく。
天ゆ海ゆ也。茶碗ゆ小石ゆても入くをゆた始ゆ光氣のうち
ゆかくれくゆゆゆ水をゆる海ゆ上へゆいわゆる多
みゆるゆくゆゆくゆ。水ゆ陽氣ゆしも。陰中の陽氣
かゆへゆ紙ようはゆてゆる也。月金ゆ。水晶ゆ命ゆ
ゆ物ゆゆゆれども。水晶の陽石ふも。陽氣のゆこゆ
ゆて足ゆる也。眼鏡とかゆくかゆしばゆくこ　くえ
ゆゆてゆゆ中光の十ゆに明ゆゆゆ

不ハ。物を隔ずと。四の方へよせく。これハ。障ふり紙ふ
うふうふ之ゞ。又四へすれうて。庭の中れ明うふた
し同し理ふて。物をつゞたまだ。のつゞける物ゆよりて。
之のうふうほうふゆる道理。いづれも同じ。一説ふ。竹の
簀之のちれ物ふれど。戸をさせば。庭ゞ暗くなて。
ひうれ出ると同じこと。これハ戸の内ふて
事なく外へ之のこゆる方ゆくくいゝゞし。家
ゆけてかげろふゆる。家ふ外ゆ出ずにてこゝ
事を云ふた。指ふちゞのこう

重遠住宮五十首ふ

新ゞう宮ふ神れるこゞゆくふてゆく月れるたくこもん
ひとゝふと。計のゆ也。ゞゞる月ハ。神ふても。又水ふて月の
うほうゆゞる事也　例　清うふる神所の浦ふ社の月家ゆるまく

ふん中ふ石ふれん　拾遺長歌下　ふた入る石間の水れゆゞる。庭ふて
る月を神ふ見るゆ　光明雲　風雅上　神ふ庭ゞる月ふ新いゞさ
かゆ見ふ。ふゞる月ふ新ゞ。ふれさ。ふく。深ふ。ふゞゆく。ゆく
うふや空ふみる月いうすゆ也。深ゆゞすゆ月れ云れく。
神ふ之のゆふゆゞ。ゆふ何ふて。事ひゞふ也かけ
ゆうふれ月れ之ふて。ゞ月ハ月の新を行ふ
ふ也。新ハ。ゆんふて。月ふ之ふ新ふ云ゆ。
うのゆくふて行ふ

春六中ふ

なみゞゆたゞゆふて。みふるんふれ神ふ春れ萩の月
深ゆくふ。湖の落ふを。神ふてゆく也。我神ハ。湖ふゆく坂
ふ。月のふふ也。ふふ神ハ。ふれが湖ふゆたふふて。く
ふゞゆふ。家ハ。ゆれ月ふ。家の神ふ。新ふくふふふふ

よろづ也。なしつぼ。ごとに。をいて。しつ也。仰そその後也。何のてもなく。いそのの梅よ。似るふくまろ。しつ梅乃すれまの風と。をうつき。身いをうつ。しの梅ふそ。をまろ。詠金葉拾遺品

拾遺の。をれなつ。いかしいて。ぐせ。ゆうなる。ゆうこ。ふちぐ。也。歌乃袖。春乃春の。をれ中。の。ふる

出しう

深ましなすむなしいを。去れ月。きてや。神。ふりけ。ぐすん

神。ようつれば。湘ゆ。やぐそ。かとむ。をしいなる。紙。きてぐ。ぐ。ゆ

や。月乃。やぐ。ん。と。月。ようつ。ひて。月。紙。ふれば。湘。ゆ。ろ。ゆ

ふを。ま。ん。

入道前太政大臣家三首　去月

去れ。ふの月乃。かつに。咲。花も。空。ふ。みそ。やうぶ。ろすむ。ん

春歌　ゆ。ふ。引。ふ。ろ。久方。れ月の。梅。と。花。ゆ。ぶ。ろ。ん　英文集春上

ゆ。ゆ。ハ月の雲。むしろして。ぶる也。世界の花。さ。ろすむ。ゆ。ゆて

月の中れ。梅乃。花い。香。なる。天上。ゆ。ゆ。ふ。ゆ。ゆ。ゆ

ゆやとれよいもがへえず去にけりすみをけるぞぞれぐけさ
長雨きゝ云詞。連歌よい雨ゝ暖なるゝよいて。雨にし同
じ事乃相よ雨ゝ。軍にゆるゝ云方を考ふ用ゝ。
梅美花の所ゝ妻しゝ。月のくもゝ紙ずゝ。ぐたゆ
ゝ。ゝ。ゝ紙ゝ。ゝ。ゝ侍也。ゝ乃表ハ明ゝ。ゝ花ゝ。
かゝむゝ。ゝ。ゝ明ゝ。月ゝ。ゝ。ゝ明ゝ。ゝ
ゝゆゝ也。此ゝ。ゝ。ゝ。ゝの表ゝ。ゝ。ゝ。ゝ也

一條入乃大納言家ふく　水ゝ玄月

一条入乃大納言未考二條入道大納言歟

かゝ。ゝ。ゝ。ゝ神乃ゝ。ゝ。ゝ。

抄同。古今。家抄云 暗中 後撰の天皇の御時依嫉妬 妻よ言

ら仏ゝる女。影ゝ如て。今の女をとゝる。心巻を祝ゝる神也云云

又云。榜手明神也云云 河辺の月の表ゝる。

面白き夜なる紙。榜姫ゝ人を待夜の湖よゝるゆ 其の

なゝしいてかゝもしゝて事もまゝばそぐ涙ゆゝとゝるゝ

又ゝゝん也

民部卿家百首　河上月

ゝゝ神のゝれゝゝしゝゝかゝもし後なゝゝ此川の其れよの月

涙川伊勢也 君ゝ行方にあるゝゝ涙川先い袖ゝぐゝ

敷ゝなる後人家抄別 ゝゝ人の涙の方ゝゝてゝゝ物ゝ

いのゝれゝ涙ゝ流ゝゝゝゝゝゝ涙川の月ゝゝ袖

のゝきゝゝいの湖ゝゝゝゝゝゝゝゝ涙川ゝいゝ

ゝゝ涙の流ゝゝゝゝゝゝゝゝ也

聖徳法王家也　春月

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

やどゝゆゝ計よ雲がたゝこゝぐ。空て月のたゞゝ行ゝを
ゝと。のゝれと。行ゝゝゝ

民部卿家にて　三月三日

春をまつ　みかきが原の　桜ばな　ちるを惜むと　ふるの山ぶき

春紙つくり　年をつくしの　ながれ　ながれて　同じ　みなかみ

上代のそむけ　ながれ　ながれて　水の流れ　末遠

末世の事　紙いとり　曲水の始　まるしるべ

ながれ　ながれ　ながれて　ながれ　ながれて　ながれ　ながれ

云。三月三日　酒漬桃花飲之除百病益顔色悅

曲水宴

いしまゆく　花のしたぶす　流れ　ながれて　ながれ　ながれ

曲水ハ。續齊諧記云。晉武帝問尚書郎摯虞曰。三

月曲水其儀何指。答曰。後漢章帝時平原徐肇

以三月初生三女俱死一村以為怪乃相携水

邊濯洗因水流以浮觴曲水起此帝曰若此所說

便非佳事摯虞不足以知臣請說其始昔周

公卜洛邑因流水以浸危故逸詩曰羽觴隨波又秦

昭王上巳置酒河曲云宋書曰自魏後用三月三日

不復用巳也云云魏文帝ハ三日を以て宴するなり。

水成巴字初三日。源起周年後幾霜菅雅親朗詠礙石遲

來心竊待牽流遡過手先遮菅雅親朗詠公事根元云是

以昔王卿かぐまつて。所ゝ作りて。詩を作りて講を終る

つゝや。作講水ゝ盃を浮てく。文人以下是をのむよし

康保ノ作詩ノ記ノ中ノ終ノ又雄略天皇元年三月己巳

日。清苑ノ幸して免ぐり水のとよれわりきこしめしと。

日本紀ノ中ノ云宣旨ノ抜ノ。日本紀巻十五。顯宗天皇

元年三月上巳幸後苑曲水宴云云雄略ノ非

紙水よりうるる花の梅や清その世の御所の月　宣房
黒風の雨、侍ふ人のいーまは世でゝみわくらの岩うた清
のあるすもかうれ人元彩　「ろろ行水の白浪立くくもくくも
はるあるあるづと方和　後拾遺　水よ梅を清くく流れ来ぬ先
う詩を作る来るれ　宗志四　まぐ詩の出来ぬ人い。梅うくく
来れよしいつる也。なぐさだい面水るれがまぐさだといつる。
まぐ詩をたくくれ梅也　「れくくくうもうれたうくふる
水くくのまぐれさた　雙　例　かきかくすきくのくをぐたちづむ
なよ身くくかくくもの川のあ　岩糸紡紙　河のあとにくる所の
新くくかきまぐくくる　新古今　秋の家　「思川岩うたよ
どい水ぐくをかくたぐいめと神いめれくう　皇太后宮注　新古今　峯ぐ
ちうくたくいきまぐ　後合　峯ー翰若流くと白もあり
「さた入道大納言家白十首　梨花

未れのしいくくと浮まくくと人のうくくわたるめくやまのれむ
「浮白ぐぐ白いまくぐうるまくー清ぐはあるもくくと
見まくや　嘉　例　「あのれ花の白雪ふるたくの花くくと白くくた冬
ぐうくくと花来来　梨花　白雪香　李白　一株香雪小梨花　竜仁
天　「たのくやまんとくくたくくくくくくくと白後也

鶯

「山　来くくと鶯くくと見てくぐくの花くくるれめたぐくくめれ
禮記月令曰。仲春月　丘遷　至　云云　又曰。仲秋月鴻雁来
玄鳥歸　云云　燕子知時節還尋舊宇歸　法法　一年一
度客天涯春社来くく秋社歸　後村詩格　鶯角呪喉日幾時
尋巣如待畫簾開　昌回詩格六　「たぐくくい。此くくし。去年の京
巣紙尋くく。くくくれ花くくぐくを立くくれくくぐくくとくくしも

雨雀　八

○三世八幡

蔵さん空ふいそしてみくまでもあけくまのあぐるをいくらのあぐるふ。稱いかとそんてどもそんてどもあぐるやちやうやいしぐらとくあぐるあぐるうらう

十四 ありる